

OKINAWA

ARTS COUNCIL

沖縄アーツカウンシル

平成30年度沖縄文化芸術を支える環境形成推進事業

支援事業事例集

目次

04 ごあいさつ

05 沖縄アーツカウンシルとは

09 平成30年度沖縄文化芸術を支える環境形成推進事業 支援事業紹介

10 区分①「文化芸術活動の持続化に向けた運営上の課題解決の取り組み」

一般社団法人 おきなわ芸術文化の箱

株式会社 クランク

合資会社 沖縄時事出版

一般社団法人 すでいる

一般社団法人 創作芸術レキオス

古見公民館

一般社団法人 与那国フォーラム

合同会社 白保企画

26 区分②「文化芸術の享受者の拡大に向けて魅力的な創造発信を行う取り組み」

株式会社 ククルビジョン

一般社団法人 エーシーオー沖縄

特定非営利活動法人 琉球交響楽団

RYUKYU カマDo! プロジェクト

沖縄県三線製作事業協同組合

36 区分③「文化芸術資源を活用して地域の諸課題の解決を図る取り組み」

株式会社 シネマ沖縄

株式会社 TEAM SPOT JUMBLE

特定非営利活動法人 地域サポートわかさ

まぶいぐみ実行委員会

漢那ドライブインアートプロジェクト委員会

一般社団法人 琉球フィルハーモニック

48 チーフプログラムオフィサーが語るアーツカウンシルの姿

—沖縄アーツカウンシルの事例から





公益財団法人 沖縄県文化振興会
理事長 仲田 美加子

ぐすーよー ちゅうがなびら。

「平成30年度沖縄文化芸術を支える環境形成推進事業 支援事業事例集」を発刊するにあたり、ごあいさつを申し上げます。

本事業は、沖縄県文化振興会が県から委託を受けて実施する事業で、今年度で2年目、前身の「沖縄文化活性化創造発信支援事業」から数えると7年目を迎えます。これまでに、のべ174件の魅力的な事業を採択し、支援して参りました。

沖縄文化の魅力は、その多彩さにあります。古くを受け継ぎ、新しきを拒まず、継承と創造を積み重ねてきたことで、今日の豊かな文化環境が形成されてきました。その先人たちの英知に学びつつ、時勢に合った方法を模索していかなければなりません。

今年度もバラエティ豊かな応募が寄せられ、アドバイザーボード委員による侃々諤々の議論により、19件の事業を採択させていただきました。そして、プログラムオフィサーという文化芸術の専門家を配置した「アーツカウンシル機能」を導入し、事業者の皆様に寄り添うハンズオン支援や評価、相談業務に取り組んでいます。

これら団体の熱意を紹介し、広く発信していくこともまた私どもの責務と考え、本事例集を発行するに至りました。お手に取っていただき、沖縄文化の力強さとその多様性を味わっていただければ幸いです。

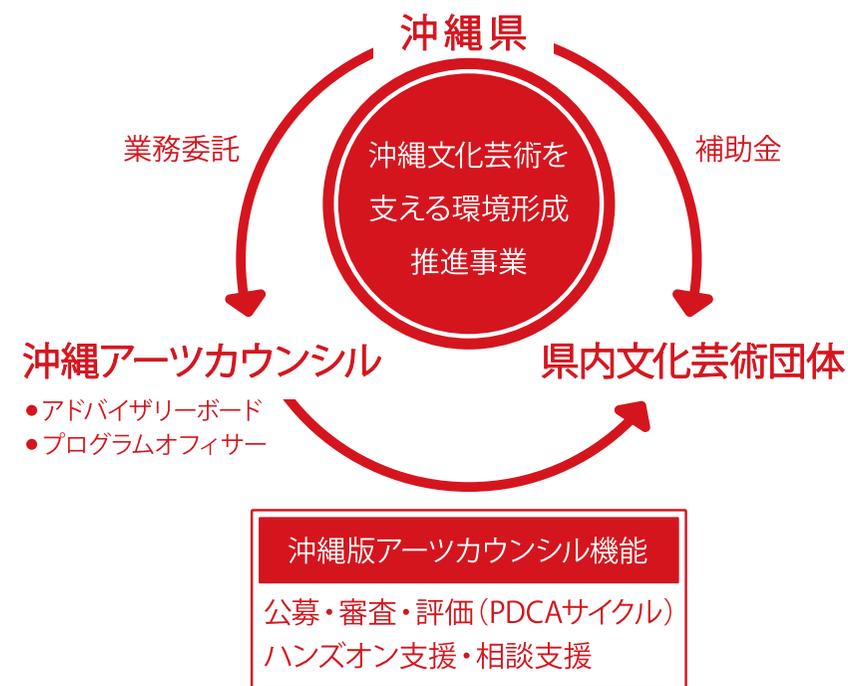
むすびに、関係者の皆さまに心から感謝申し上げ、挨拶といたします。

沖縄アーツカウンシル
沖縄文化芸術を支える環境形成推進事業とは

沖縄は、古来、アジア諸国との交易を通じて多様な文化芸術を受け入れ、沖縄の精神的、文化的風土と融合させることで、亜熱帯の海に囲まれた美しい島々に、独特の文化芸術を育んできました。

文化芸術は、長い歴史の過程で積み上げられ、伝えられてきた英知の結晶であり、人々が心豊かに生き、活力のある社会を築き、世界と友好を深めていく基盤として、本県の発展に欠かせないものです。（沖縄県文化芸術振興条例前文より）

こうした認識に立ち、私たちは、本県の多様で豊かな文化資源を活用した文化芸術活動の持続的発展を図ることを目的に、沖縄版アーツカウンシル機能を導入した「沖縄文化芸術を支える環境形成推進事業」に取り組んでいます。本事業は、沖縄県から委託を受け、県内の文化芸術団体に補助金を通じて支援を行っています。



沖縄アーツカウンシルは、文化芸術分野の専門家で構成されるアドバイザーボードを設置し、寄り添い型のハンズオン支援を行うプログラムオフィサーを配置しています。アドバイザーボードは、事業の選定及び評価・検証、プログラムオフィサーはハンズオン支援や相談業務のほか、県内の文化芸術の活動状況を踏まえた助成制度の構築を行っています。

<関連する条例・施策>

- ・沖縄県文化振興条例
<http://www.pref.okinawa.jp/site/bunka-sports/bunka/140926.html>
- ・沖縄21世紀ビジョン
<http://www.pref.okinawa.jp/21vision/>
- ・沖縄県文化観光スポーツ部文化振興課 施策概要 (P.55掲載)
<http://www.pref.okinawa.jp/site/bunka-sports/bunka/kikaku/2018shingikai.html>

沖縄文化芸術を支える環境形成推進事業では、県内文化関係団体が行う、①文化芸術活動の持続化に向けた運営上の課題解決の取り組み、②文化芸術の享受者の拡大に向けて魅力的な創造発信を行う取り組み、③文化芸術資源を活用して地域の諸課題の解決を図る取り組みに対して、県内より広く事業を公募しました。

①文化芸術活動の持続化に向けた運営上の課題解決の取り組み

文化芸術活動の持続可能性の向上に資する取り組みを公募します。

- *文化芸術活動の持続化に向けて、事業の企画や財務管理を行う事務局体制の構築を図る取り組み
- *文化芸術を支える担い手の育成・継承に関する取り組み
- *文化芸術団体や人材の組織化を図る取り組み …など

②文化芸術の享受者の拡大に向けて魅力的な創造発信を行う取り組み

県内文化芸術の享受者の創出拡大に資する取り組みを公募します。

- *認知度の向上やリピーターの獲得に向けた体系的な計画を有する文化芸術事業
- *外部の専門家・団体等と協働して行う意欲的かつ主体的な文化芸術事業
- *創作人材の育成やアーティスト交流を伴う魅力ある文化芸術事業 …など

③文化芸術資源を活用して地域の諸課題の解決を図る取り組み

文化芸術の社会的役割の創出拡大に資する取り組みを公募します。

- *県内の民間事業所（観光、まちづくり、産業その他の関連分野）と連携して行う文化芸術事業
- *教育機関（各種学校、図書館、博物館、公民館等）と連携して行う文化芸術事業
- *異なる背景を持つ人々の間の新たなコミュニケーションの創出拡大に向けて、関係機関（福祉、国際交流、その他の関連分野）と連携して行う文化芸術事業 …など

補助率 1年目 = 90% → 2年目 = 80% → 3年目 = 70%

補助対象経費に補助率を乗じた額で、それぞれ以下の額を上限とします。

| 補助金額 | 補助率 |
|----------------------------------|--------|
| ① 文化芸術活動の持続化に向けた運営上の課題解決の取り組み | 500万円 |
| ② 文化芸術の享受者の拡大に向けて魅力的な創造発信を行う取り組み | 500万円 |
| ③ 文化芸術資源を活用して地域の諸課題の解決を図る取り組み | 1000万円 |

沖縄文化芸術を支える環境形成推進事業・年間スケジュール（例年）



※例年、上記のようなスケジュールとなっておりますが、変更になる可能性がありますので、参考程度にご覧ください

①文化芸術活動の持続化に向けた運営上の課題解決の取り組み

- 「劇場を活用した創造交流基盤形成事業」 一般社団法人おきなわ芸術文化の箱
- 「沖縄とアジアを結ぶ音楽ネットワーク構築事業」 株式会社クランク
- 「沖縄の出版文化を通じた東アジアへの事業展開の推進」 合資会社沖縄時事出版
- 「[平和と鎮魂]をテーマとするネットワーク型国際芸術祭へ向けたアーティスト交流事業」 一般社団法人すでいる
- 「創作エイサー団体連携強化・普及活動及び自走化に向けた組織の強化事業」 一般社団法人創作芸術レキオス
- 「映像・記録作成資料を活用した地域文化の次世代育成事業」 古見公民館
- 「与那国民俗芸能の継承に向けた調査、及び人材育成計画策定事業」 一般社団法人与那国フォーラム
- 「次世代を担う八重山芸能後継者育成支援事業」 合同会社白保企画

②文化芸術の享受者の拡大に向けて魅力的な創造発信を行う取り組み

- 「映画を通じて異文化理解を深め沖縄の才能を育てる映画祭(KIFFO)の長期運営基盤作りと、自発的に行動する人を育てるワークショップ関連事業」 株式会社クルルビジョン
- 「わたした島子どもアート」 一般社団法人エーシーオー沖縄
- 「まちなかコンサートを活用した芸術文化発信事業」 特定非営利活動法人琉球交響楽団
- 「琉球料理をツールとして、沖縄の魅力を国内外に発信できる子どもたちを育成するプロジェクト」 RYUKYU カマDo! プロジェクト
- 「三線文化の普及連携事業」 沖縄県三線製作事業協同組合

③文化芸術資源を活用して地域の諸課題の解決を図る取り組み

- 「地域の8mm映画オープンデータ実証実験によるデジタルアーカイブ・ネットワーク推進事業」 株式会社シネマ沖縄
- 「社会的課題に向き合う演劇ワークショッププログラム研究・開発」 株式会社TEAM SPOT JUMBLE
- 「移動式屋台型公民館を活用した地域住民主体の「つどう・まなぶ・むすぶ」創造拠点創出事業」 特定非営利活動法人地域サポートわかさ
- 「祭祀を記録した写真による地域の精神文化創出に資する事業」 まぶいくみ実行委員会
- 「漢那ドライブインアートプロジェクト2018」 漢那ドライブインアートプロジェクト委員会
- 「ジュニアジャズオーケストラによる子どもの居場所づくり」 一般社団法人琉球フィルハーモニック

プログラムオフィサーの紹介

チーフプログラムオフィサー

Chief Program Officers

林立騎 (はやし たつき)

新潟県栃尾市出身。専門は翻訳、リサーチ、演劇研究。訳書にイェリネク『光のない。』、共編著に『Die Evakuierung des Theaters』。リサーチ・制作活動に高山明/Port B『東京ヘテロトピア』(東京)、『北投ヘテロトピア』(台北)など。現在、京都造形芸術大学非常勤講師、NPO法人芸術公社ディレクターズコレクティブ、ロームシアター京都「古典芸能と現代演劇」リサーチャー、東京都港区文化芸術サポート事業評価員を兼務。

樋口 貞幸 (ひぐち さだゆき)

NPO法人アートNPOリンクの立ち上げに参加、2015年度まで同法人常務理事兼事務局長として、アートNPO等市民団体の水平的な全国ネットワークの構築、実態調査、政策提言のほか事業支援に取り組む。監修・編集・執筆に『アートが拓く、あたらしい大阪～大阪アーツカウンシルに向けて』、『地域に根差したアートと文化』(ともに大阪府・大阪市)、『アートNPOデータバンク(全シリーズ)』等。現在、オフィス・へなちよこ代表、NPO法人淡路島アートセンター監事、大阪市立大学都市研究プラザ特別研究員。

プログラムオフィサー

Program Officers

芦立 さやか (あしだて さやか)

北海道出身。アートスペースや芸術祭等の現場で美術展の企画制作に携わってきた後、2010年に文化庁新進芸術家海外研修制度でニューヨークに滞在し、アーティスト・イン・レジデンスやアーティストのスタジオのリサーチを行う。2011年より、京都市でアーティストのアトリエや発表の機会等をつくる支援団体「東山 アーティスト・プレイメント・サービス(HAPS)」の事務局で勤務。事業に関わる中で広報、助成金申請等も幅広く経験。現在は、那覇市内でアートスペース「Arts Tropical」を運営。

島袋 弥生 (しまぶくろ やよい)

広報やPR、イベント運営などのプロモーション業務を経験。課題整理のための調査や分析に携わるほか、観光情報サイト等メディアでの執筆も行う。また、人が行き交う「場づくり」をデザインするインテリア・プロダクトデザイナーとしても活動する。

新城 友紀 (しんじょう ゆき)

沖縄県八重瀬町出身。専門はクラシック音楽ピアノ。ウィーンでピアノ演奏法や音楽教育を学ぶ傍ら、国内外でソロ・室内楽アンサンブル、歌曲伴奏、音楽レッスンなどの音楽活動を行う。イスタンブール/トルコで行われたトルコ人女流作曲家ナチフェ・ギュランのレクチャーコンサートにてピアノ曲を初演。2014年ウィーン国立音楽大学大学院器楽教育科(専攻ピアノ)の修士号を取得し帰国。2年間音楽教諭(臨任)として県立高校に勤務。現在も演奏活動を行いながら、合唱のピアノ伴奏兼指導手を務めている。

林 恭子 (はやし やすこ)

青森県津軽生まれ。沖縄の風土と文化に魅了され、2003年から那覇市在住。那覇市内で劇場の立ち上げと運営に携わり、映画の宣伝や離島上映会のほか、音楽公演、演劇ワークショップ、市民向け講座の企画制作などを担当。その後、新聞社での取材・執筆・イベントづくりや舞台公演の企画制作に関わる。現在は沖縄民謡唄者のマネジメント業務を時々つとめながら、幼児ふたりの子育てにも奮闘中。遠い目標は沖縄と津軽の文化の融合。

平岡 あみ (ひらおか あみ)

東京都杉並区出身。細踊に興味を抱いたことをきっかけに、大学卒業後から那覇市在住。現在、大学院で観光学の研究をしたり、沖縄県青年団協議会の事務局をしたり、イベントスペースの企画をしたりしている。

野村 政之 (のむら まさし)

長野県塩尻市出身。演劇制作者/ドラマツルク。舞台芸術の創造現場と文化行政・芸術支援に関わる仕事を並行して行っている。(公財)沖縄県文化振興会では、2014年10月から2018年9月までの間に約3年間、プログラムオフィサーを務めた。現在、長野県県民文化部文化政策課文化振興コーディネーター。

*アドバイザリーボードは非公開です。

沖縄アーツカウンシル

平成30年度沖縄文化芸術を支える環境形成推進事業

支援事業紹介

劇場を活用した創造交流基盤形成事業

一般社団法人 おきなわ芸術文化の箱

住 所 那覇市字銘苅203番地

メール oact@m-base.okinawa

URL <http://oact.otonadan.com/oact/>

<https://www.m-base.okinawa/>



シンポジウム「演劇のある街をつくる」

民間の小劇場を拠点に

2017年7月に、おきなわ芸術文化の箱は、那覇市内にキャパシティ80席ほどの小劇場「アトリエ銘苅ベース」をオープンした。この大きさの劇場は県内ではほとんど見かけないが、環境形成推進事業を活用して、複数の層から観客・支援者の創出を試みている。現在、県外の劇団も数多く公演を実施し、演劇シーンでは注目の場所となっている。

演劇を支えるひとを育てる

県内では、劇場の機材を扱える舞台スタッフが不足しており、県内の劇団によるアトリエ銘苅ベースの使用が少ない原因のひとつになっていると考えられる。そこで、実践的に舞台監督、照明、音響、制作の技術を教える「舞台技術講座」を開催。受講生は後日、県外の劇団の舞台上演の際にサポートスタッフとして実践を積むなど、少人数でありながらも、着実に人材は育ち始めている。また、将来の演劇シーンを担う人材の育成のため、高校演劇との連携にも着手している。県大会の最優秀賞を受賞した高校に、公演の場としてアトリエ銘苅ベースを提供。大会とは異なり、演劇を心から楽しめる場になっている。その他、県外で演劇教育を取り入れている追手門学院高校の事例をヒアリングし、県内の関係者に

に向けた報告会を行った。

劇場を運営していくためには、観客を増やすだけで収支を合わせることは難しい。演劇の支援者を増やすことを目的として、創業者物語の創作にも取り組んでいる。時間のかかるプログラムではあるが、企業からは収入を得やすいとともに、演劇活動への理解を深めてもらうことにつながる。

地域と連携し、新しい観客を見つける

観客創出のために劇場から離れて、リサーチやワークショップを通して地域を題材とした作品を創作し、その地域の中で上演するという活動もある。今年度は、昨年度に創作した太宰治『地図』の朗読劇+歴史講座を、作品の舞台となっている那覇市首里にある寺院と石垣市内のカフェやホテルで上演した。いずれも、普段は演劇を観に来ないという人が多く来場し、自分の歴史を知ることができたと、満足度も高かった。また、本プロジェクトをモデルに、「『軽便鉄道物語』演劇創作ワークショップ」を開催して、新たな作品づくりをスタートしている。関連して、県外から劇団こふく劇場代表・永山智行氏やboxes Inc.代表・鈴木拓氏らを招いて「演劇のある街をつくる」というテーマでシンポジウムを開催した。



達磨寺西来院での公演



にぎわいをみせるアトリエ銘苅ベース

県外とのネットワークの充実

昨年度に引き続き、「全国小劇場ネットワーク会議」や「TPAM—国際舞台芸術ミーティングin横浜」に参加し、県外とのネットワークを構築し、発展させている。これまで、提携カンパニーとして年間11団体の劇団がアトリエ銘苅ベースにて公演を行っているなど、着実に成果があらわれてきている。中には滞在制作を行ったり、地元の劇団や高校生向けにワークショップをしたりと、地域への波及効果をもたらしている団体もある。また、他の小劇場と連携して劇団がツアーを組みやすくするなど、さまざまなアイデアが上がっており、今後の発展性もうかがえる。

プログラムオフィサーのコメント

アトリエ銘苅ベースは、宿泊ができたり、その場で打ち上げ(ときどきBBQも!)ができたりと、作品をつくる・みるだけでなく、交流の場としてもますます活性化しています。2週間に1度のペースで行っている全体ミーティングでは、毎回新しいアイデアが飛びだして、私もわくわく。伴走する仲間も増えてきているので、これからは県内の他劇団との交流も活発になるでしょう。今後の発展が楽しみです。(平岡)

活 動 詳 細

①人材育成の取り組み

- ・舞台技術講座(照明・舞台監督・制作)の開催
- ・提携カンパニーの公演における舞台技術のOJT研修
各会場:アトリエ銘苅ベース(那覇市)

②支援者創造のこころみ

③地域との連携強化・地域間交流

- ・朗読劇+歴史講座「太宰治『地図』」
会場:達磨寺西来院(那覇市)、ホテルエメラルドアイランド(石垣市)、トラベラーズカフェ朔(石垣市)
- ・シンポジウム「演劇のある街をつくる」
会場:アトリエ銘苅ベース
- ・「『軽便鉄道物語』演劇創作ワークショップ」
会場:アトリエ銘苅ベース

④高校演劇との連携と人材育成計画

- ・「沖縄県高等学校演劇大会」の優秀校へ劇場を提供
- ・追手門学院高等学校表現コミュニケーションコースの視察
- ・視察報告会「高校演劇との連携と人材育成計画」
会場:ひめゆりピースホール(那覇市)

⑤県外とのネットワークの維持・発展

- ・全国小劇場ネットワーク会議に参加
会場:若葉町ウォーフ(横浜市)
- ・「TPAM—国際舞台芸術ミーティング in 横浜」のグループミーティングに参加
会場:横浜市開港記念会館(横浜市)

沖縄とアジアを結ぶ音楽ネットワーク構築事業

株式会社 クランク

住 所 那覇市牧志3-6-10

URL facebook.com/musicfromokinawa/



各国のミュージシャンによるプレゼンテーションの様子

沖縄音楽を発信、アジア進出への架け橋に

クランク（桜坂劇場と音楽プロジェクト「Music from Okinawa」を運営）が実施する「沖縄とアジアを結ぶ音楽ネットワーク構築事業」は、沖縄県内で活躍するミュージシャンの活動範囲を広げ、世界に沖縄音楽の魅力を発信し、流通を促進させることを目的とした事業である。流通を図るためには、広域でコネクションを作り、アジア各地の音楽プロデューサー同士でのネットワークを前もって構築することが不可欠であるという考えのもと実施している。

アジア10か国の音楽プロデューサーが一同に集まる音楽国際会議「トランス・アジア・ミュージック・ミーティング」の開催

アジア各国で開催するショーケース・フェスティバルでは、多くのミュージシャンが次のステップの足掛かりとして参加する。県内で同様な役割を担うのが、Music from Okinawaと桜坂劇場が主催する「Sakurazaka ASYLUM」であり、相乗効果を期待して同時期に開催するのが、音楽国際会議「トランス・アジア・ミュージック・ミーティング（以下、TAMM）」である。ミーティングに音楽プロデューサーを招聘し、アジアでのネットワーク構築に向けて議論するとともに、Sakurazaka

ASYLUMに参加するミュージシャンなどに対し、プレゼンテーションやマッチングの場を設定、具体的な海外進出アドバイスや販路開拓につなげることを狙う。

アジア広域でのネットワークが、アジア音楽シーンの活性化の鍵

TAMMの回数を重ねることで、沖縄の音楽シーンは少しずつだがアジア各地でも認知されるようになってきた。こうした動きは日本のほかの地域にはほとんどなく、独自のネットワークが着実に構築されている。

アジアの音楽シーンはメジャー、インディーズに関わらず熱を帯びてきており、自国を出て国際的に活躍するバンドも目立ってきている。そうした中で、独自のルートを持つということは非常に重要で、本事業を通して培ってきたネットワークは、今後非常に大きな可能性を秘めている。

こうしたネットワークは一方通行ではなく双方向であることが重要で、沖縄のミュージシャンを海外に紹介すると同時に、海外のミュージシャンを沖縄、日本本土で紹介する機会も積極的に作っていくことが重要だ。相互に行き来を重ねることで、沖縄を含むアジア地域の音楽シーンを活性化することにつながるものと考えられる。



自らの売り込みができる「1on1 Meeting」



オープニングでは、The SAKISHIMA Meetingのショーケースも実施

TAMM 2019を終えて

2月8日のオープニングを皮切りに、9～10日の2日間開催された。10のプログラムには、9か国24名の音楽関係者たちが登壇した。1日目は、アジア各地で行われている音楽フェスティバルについて、その社会的役割を事例をもとに紹介。2日目は、韓国発の音楽プラットフォームの仕組みなどを紹介し、アジア広域でネットワークを築くための議論を行った。クロズドミーティングでは、アジアを網羅した音楽ネットワーク構想が発案され、独自の公式サイトを公開する話もまとまった。第一段階としてTAMM参加メンバーの音楽フェスティバル、関係者の情報を一元化して公開し、今後、より広がりを見せることを期待する。

プログラムオフィサーのコメント

登壇者の皆さんがすごくフレンドリーで互いの議論を前向きに捉えていることに驚きました。この事業の趣旨であるように、登壇者の皆さんがネットワークの構築が非常に重要であるという認識を持ち、前提の課題が共有されていたからだと思います。ショーケースに位置するSakurazaka ASYLUMでは、積極的に海外のミュージシャンを受け入れしており、相互に交流ができる土台の仕組みづくりにも動かれていたのは、今回の成果の一つだったように思います。(島袋)

活動詳細

- ①アジア各都市との音楽ネットワーク構築・情報交換・情報共有
訪問先:Zandari Festa(韓国ソウル市)、LUC fest(台湾台南市)など
- ②「トランス・アジア・ミュージック・ミーティング 2019」開催
 - ・Session A「Trans Asia Music Meeting opening & reception」
 - ・Session B「Asian bands heading to the globe ～アジアのバンドは世界を目指す～」
 - ・Session C「Introduction for Musicconnect Asia ～Musicconnect Asiaが目指すこと～」
 - ・Session D「What is a showcase festival? ～ショーケース・フェスティバルってなんだ?～」
 - ・Session E「Social Roles of World music festival ～ワールドミュージック フェスティバルの社会的役割～」
 - ・Session F「What today's management is doing? ～マネジメントという仕事について～」
 - ・Session G「Tips for delivering music to China, Mongolia and Taiwan～中国・モンゴル・台湾に音楽を届けるためのヒント～」
 - ・Session H「New Music Platform from Korea ～韓国発の新たな音楽プラットフォーム～」
 - ・Session I「Music festival from Southeast Asia ～東南アジア発の音楽フェスティバル～」
 - ・Session J「1on1 Meeting」
各会場:桜坂劇場(那覇市)

③アジア発信の音楽チャート ローンチの可能性のリサーチ

沖縄の出版文化を通じた 東アジアへの事業展開の推進

合資会社 沖縄時事出版

住 所 那覇市壺川1-3-10 沖縄時事出版編集部内

メール edit-gg@flute.ocn.ne.jp

URL http://www.okinawabon.com/



北京の「中華書局」で沖縄県産本を紹介

沖縄の出版文化をアジアへ

沖縄県の出版活動が日本全国でも比類のない独自性をもっていることをご存知だろうか。沖縄は人口に対する書籍の出版社・出版点数が多く、その内容も多様だ。流通の仕組み上、全国各地にはなかなか出回らないが、沖縄時事出版が中心となって環境形成推進事業を活用しながら進めているのは、その本を広く東アジアへ発信し、翻訳出版を促そうという取り組みである。

沖縄の歴史を支えてきた出版文化も、今ではいくつかの課題を抱えている。活字離れ、出版人の高齢化、市場規模の縮小などだ。こうした課題に対して、沖縄への観光客を増加させている東アジアにアプローチし、国際交流を通じて解決を図ろうとする試みが本事業である。

アジアにおける交流と発信

しかし東アジアの出版社とどのように交流すればいいのか？ 2005年から日本、中国、台湾、香港、韓国の名だたる出版社が加盟して出版に関する議論を重ねてきた「東アジア出版人会議」に、2016年に沖縄が6番目の独立した地域として加盟した。それをきっかけに、東アジア各地域の出版社から全面的な協力を受け、ネットワークを活かし、事業展開が行われている。

具体的には、年2回開催される東アジア出版人会議へ

沖縄の出版人を派遣し、沖縄の出版状況を発表するとともに、各地の情報を収集。また、沖縄県産本ブックリストを各国に向けて各言語で作成し、国際ブックフェアに参加した上で、主要な出版社は直接訪問している。これまでの事業を通じて『はくの〈那覇まち〉放浪記』（新城和博著、ボーダーインク）、『おうちでうちなーごはん』（はやかわゆきこ著、ボーダーインク）、『那覇の市場で古本屋』（宇田智子著、ボーダーインク）、『与那国台湾往来記』（松田良孝著、南山舎）が台湾や韓国から翻訳出版されるなど、すでに成果も生まれている。

出版文化を軸に、新しいつながりをつくる

沖縄時事出版の事業には、県内の出版社だけでなく、沖縄県立図書館や県内の若手研究者も参加している。本事業がプラットフォームとなり、出版に関する課題や対策を議論する場が生まれ、そこに図書館や専門家の視点が加わった。その成果として、沖縄出版協会の設立準備が始まり、沖縄における図書館と出版の将来像をテーマにしたシンポジウムが開催されるなど、今後の連携強化が期待されている。

事業の間接的な成果としては、ユネスコ創造都市（文学部門）に認定された韓国・富川（プチョン）市に沖縄関連書籍専門の図書館「沖縄特別館」がオープンし、開館式には沖縄の図書館職員、出版人、研究者が招か



東アジア出版人会議プチョン大会の様子



会議で発表するボーダーインクの新城和博氏

れ、「琉球・沖縄国際学術大会」が開催された。その後、富川市と沖縄県立図書館との交流がスタートしている。また、県立図書館新館のオープンに際しては、本事業のネットワークを活かして、東アジア各地域から1000冊以上の書籍が寄贈されるなど、出版文化を軸に東アジアと沖縄のあいだには新しいつながりが生まれつつある。

プログラムオフィサーのコメント

沖縄の出版は独自の文化であり地場産業ですが、中国や韓国の名だたる出版社と比べれば、当然ながらはるかに小規模です。そうした中で東アジアでの交流が発展しているのは、沖縄の出版が注目されているからであるとともに、沖縄の出版人のみなさんの人間性が信頼を得ているからだ日々実感しています。沖縄と東アジアの相互理解が深まり、沖縄の出版文化が新たなカタチで続いていく環境が生まれつつあると感じます。(林 立騎)

活 動 詳 細

- ①県産本ブックリストの作成
韓国、中国、台湾向けのブックリストを各言語で作成
- ②県産本の海外展開
・中国の四大国営出版社を訪問
・台北国際ブックフェアに参加
会場：Taipei World Trade Center(台湾台北市)
- ③東アジア出版人会議への沖縄出版人の派遣
第25回東アジア出版人会議 プチョン大会
会場：サンドン図書館(韓国プチョン市)
- ④県立図書館との協力関係の構築
・事業事務局への参加
・東アジア出版人会議加盟の出版社から県立図書館への図書寄贈
・シンポジウム「沖縄の図書館と出版の未来を考える」の開催
会場：沖縄県立図書館(那覇市)
・台北国際ブックフェアに合わせた県産本の展示
- ⑤沖縄出版界のプラットフォームの構築
・ホームページ「沖縄本.com」へ事業内容をアップ
・県産本ブックリストの掲載

「平和と鎮魂」をテーマとする ネットワーク型国際芸術祭へ向けた アーティスト交流事業

一般社団法人 すでいる
住 所 中頭郡読谷村都屋431
メール sudeiruinfo@gmail.com
U R L facebook.com/sudhiruproject/



济州島でのリサーチ

マブニ・ピースプロジェクトから 国際芸術祭へ

激戦地であった糸満市摩文仁。そこに位置する沖縄県平和祈念資料館などで、「平和と鎮魂」をテーマとする美術展「マブニ・ピースプロジェクト（以下、MPP）」は、世代を超えて集まった沖縄県内外で活動するアーティストを中心に、2015年から過去に4回開催されてきた。毎回、アーティストたちは普遍的なテーマである「平和」について向き合いながら作品を制作、展示している。アーティストが自発的に継続してプロジェクトに参加し、発展していることが本プロジェクトの特徴だ。回を重ねていく中で、当初から構想していた同様のテーマの国際展開に向け本格的に動き始める。海を超えたネットワーク構築には、アーティスト間のつながりという柱がさらに重要になってくる。

韓国济州島と沖縄の アーティストを通じた交流

今年度は、かねてから交流のあった韓国济州島のアーティストたちとより親交を深め、国際芸術祭の開催に向け、話し合いを重ねてきた。济州は沖縄と相似している点が多い。本土から離れ、独特の文化や風土を持った島であり、国家暴力の犠牲となって多くの島民が

命を奪われた歴史経験を持ちながらも、現在は観光地として賑わう。2018年は济州島の数万の住民が虐殺された「济州島4.3事件」から70年の節目であり、济州内外で、その事件を通して平和について考える機会が増えている。かつてはこの事件について調べることも話すことも禁じられていたが、現在は法も改正され、徐々に明るみになってきている。その背景には、4.3事件について取り組んできた济州のアーティストたちの功績が大きい。18年6月に開催されたMPPではそんな济州のアーティストが参加した。

10月には、前济州芸術文化財団理事長で、アーティストでもある朴京勳（パク・キョンフン）氏、キュレーターの前济州道立美術館長の金俊起（ギム・ジュンギ）氏を沖縄に招き、さらなる相互理解と交流を目的にした勉強会を開催。続く11月には济州島の4.3平和記念館で沖縄、济州、それぞれのアーティストが参加する交流美術展とシンポジウムを開催。MPPにこれまで継続的に参加しているアーティスト8名（新垣安雄、石垣克子、上原秀樹、儀保克幸、児玉美咲、平良亜弥、比嘉豊光、与那覇大智：敬称略）が济州を訪れ、実際に济州の歴史的遺産や文化施設を訪問し、理解を深めた。2019年1月に沖縄で実行委員やアーティストからの济州島での報告、これからの展望についてのシンポジウムを開催。これらの往来により、着実にネットワークは構築されている。



朴氏、金氏を招いてシンポジウムを開催

組織強化とさらなる発展へ

今後、国際芸術祭へと展開していくためには、組織体制を強化する必要がある。まず、2017年に一般社団法人すでいるを設立し、支援者拡大に向けて広報を強化するなど、新たな取り組みを始めている。次年度以降は、今回の济州で行った展覧会をモデルケースとし、他国へ波及させていきたいと考えている。MPPに参加したアーティストには、東アジア諸国とのつながりを持ち、美術展を開催するなどの実績を有するメンバーがいる。そのつながりを活用し、今後ますます活動は広がっていくだろう。

プログラムオフィサーのコメント

MPPの活動がいよいよ海外へ！济州の展覧会のオープニングレセプションに立ち会わせていただきましたが、それぞれ立場に関係なく、肩を並べ、和気あいあいと交流しているようすがとても印象的でした。参加している沖縄のアーティストたちにとっても、国外の歴史や文化に直接触れる中で、自身の活動や作品について客観的に見つめ、向上させる良い機会になったのではと思います。（芦立）



济州4.3平和記念館での展覧会オープニング

活 動 詳 細

- ①韓国济州特別自治道との拠点ネットワークづくり
 - ・交流シンポジウムの開催
 - 1)「沖縄と济州島のアーティストを結ぶ
ワークショップ in 沖縄 ―平和の-artの要石に―」
会場：ひめゆりピースホール(那覇市)
 - 2)「歴史のトラウマに向き合う-art」
会場：济州4.3平和記念館(韓国济州市)
 - 3)「沖縄・济州 交流美術展」報告会
会場：沖縄県立博物館・美術館(那覇市)
 - ・济州島での交流シンポジウム会場においてMPP活動の展示と作家作品の展示
沖縄と济州 交流美術展「見えないものを可視化する Key Stone Islands of Peace Art, Okinawa and Jeju— Making the Invisible Visible—」
会場：济州4.3平和記念館
- ②台湾とのネットワークづくりの準備
- ③自主財源確保活動
- ④配布用報告書の作成と配布

創作エイサー団体連携強化・普及活動及び自走化に向けた組織の強化事業

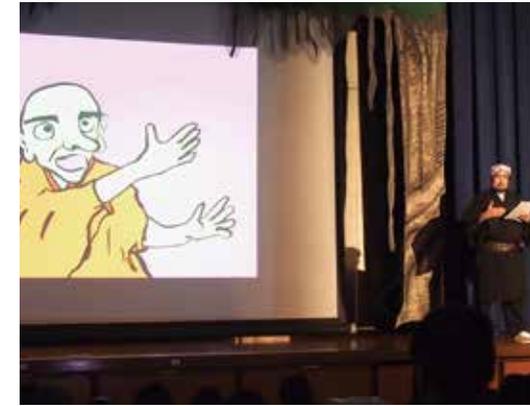
一般社団法人 創作芸団レキオス

住 所 名護市為又255-1

U R L requios0923.wixsite.com/requiosofficial



迫力あるエイサー演舞



歌も交えて、紙芝居を読み聞かせる



協議会の会議のようす

課題解決のための、ネットワークづくり

近年、創作エイサー団体は100団体以上を数えるほど団体数が増え、その活動は多岐にわたっている。児童・青少年の健全育成の場や県外・国外の人との文化交流の機会として、また、観光コンテンツとしても重要な役割を果たしている。その一方で、担い手の若年齢化にともなう練習場や演舞会場等でのマナーの悪化を問題視しているという声もあがっている。また、県内外問わず創作エイサーへのニーズが高まっていることから、海外への団体派遣など、一つの団体では負担が大きい案件が増えてきている。こういった課題を解決していくことを目的として、「創作エイサー協議会」が設立された。

自走化に向けて、基盤を整える

平成29年度より準備委員会を発足し、幾度も議論を重ねた上で、2018年4月1日に任意団体として立ち上がった。8団体の創作エイサー団体から構成されており、各団体の代表が役員を担っている。事務局は、創作芸団レキオスのメンバーが担い、運営の経験を積むことで自団体の基盤強化にもつなげている。

今年度は本会の今後の発展に向けて、どういった活動が必要か、どのように体制を整えていくかという議論をしてきた。活動目的や経験の異なる複数の団体が集

まるということから、それぞれの負担が大きくなりたくないよう、慎重に話し合いを進めている。活動としては、会員向けに研修会を実施し、普段の創作や活動につながる学びの場を提供した。これにより今後の会員数の増加が期待できる。また、協議の中で、沖縄県文化振興会が事務局を担っている「全保連presents 世界エイサー大会交流祭2018」に共催団体として運営面で協力することとなった。

ほかにも、協議会が設立されたことによって、会員・団体相互の交流が生まれ、外部からの出演依頼に複数の団体で対応したり、自団体で対応できない案件については他団体に受け継いだりということが行われるようになった。また、フェイスブックページを立ち上げ、相互に公演の情報を宣伝している。

エイサーの歴史を伝える

北部の過疎地域や離島地域を対象として、エイサーの歴史を普及する活動にも力をいれている。昨年度未就学児を対象に取り組んだ「創作エイサー鑑賞会」での歴史講話は、幼稚園・保育園児には難しく、伝わらなかった部分があった。そこで、低年齢の子どもにもエイサーの歴史を伝えられるよう、紙芝居の手法を取り入れたプログラム「エイサー歴史紙芝居」を開発した。保育園で3回、名護市民会館中ホールで1回上演し、その効果

を検証。いずれも、子どもたちは集中して上演を観ていたが、しまくとぅばの頻度など、工夫の余地はまだ残った。次年度に向けて、ブラッシュアップを重ねたい。また、プログラムが口コミで話題を呼び、ほかの保育園や離島地域などから鑑賞会を実施してほしいという要望が複数ある。自走化に向けて、予算面も含めて検討していく予定だ。

プログラムオフィサーのコメント

沖縄の民俗芸能をベースに、アクロバティックな動きや斬新な演出を加えた創作エイサーは、団体によって作風はもちろん、目的や活動内容もさまざまです。そのような団体が複数集まって、事業を実施することは容易なことではありません。それぞれが抱えている課題は、他団体と共有することが解決への近道だと感じているからこそ、本協議会が結成されました。まだ設立1年目で不確定なこともありますが、今後の活動が楽しみです。(平岡)

活 動 詳 細

- ①創作エイサー協議会の研修会、検討委員会
会場：泡瀬第三自治会(沖縄市)
- ②エイサー歴史学習プログラムの開発及び芸術鑑賞会
会場：名護市社会福祉法人愛児福祉会 やまびこ保育園(名護市)、名護市民会館中ホール(名護市)、名護市社会福祉法人城山ネットワーク あすなろグレースこども園(名護市)

映像・記録作成資料を活用した
地域文化の次世代育成事業

古見公民館

住 所 八重山郡竹富町古見7-1



古見公民館での工工四を用いた後継者育成のようす

継承の危機にあらたなアプローチを

西表島の古見は、歴史的に古い村落で、多くの年中行事が執り行われてきた。しかし過疎が進み、芸能保存会の活動は難しくなった。祭事を継続するための人数が少ない地域となり、後継者を育成できる住民もわずかになってしまった。

こうした危機に対して、地域に残る音声テープや映像資料を大学・研究者の協力を受けてデジタル化し、そこから作成された工工四（三線等の記譜をするために用いられる楽譜、くんくんしー）を利用して、おもに小中学生を後継者として育成しようとするのが古見公民館の事業である。

地域の思いに支えられた地謡の育成

年中行事の奉納芸能に関しては、とりわけ演目の地謡の担い手育成に大きな課題がある。古見の結願祭（きつがんさい）では30演目ほどの狂言と舞踊を演じることになっているが、地謡の不足からできない演目も多く、中長期的な地謡の育成は喫緊の課題だ。

事業開始後に作成された工工四を用いて、古見公民館では少人数の練習が始まり、地域の人々の思いに支えられ、各家庭での自主練習も続けられた。その結果、2018年の結願祭では早くも『鷲ぬ鳥節』を中学生の三線

と笛で演奏することができた。また、その2ヶ月後に開かれた「竹富町民俗芸能発表会」でも、結願祭で奉納される狂言『長者の大主』を小中高生が中心になって披露した。

古見の取り組みは、竹富町を中心に他の地域からも注目されてきている。それは新しい手法で継承に取り組み、子どもたちに発表の機会をつくっていることに加え、後継者育成に日々どのように向き合っているのか、その熱意への敬意からだろう。

次世代育成をきっかけに、地域の新しいつながりへ

地域文化の次世代育成を通じて、地域に新しい協力関係が生まれつつある。古見公民館のはたらきかけにより、古見小学校では学校行事の学習発表会で古見の唄を取り入れることになり、子どもたちが地域の唄を学ぶ仕組みが学校の中にも整いつつある。事業で作成された工工四は郷友会とも共有され、郷友会は本事業への寄付金を募って支援した。芸能を軸に結びつきを見直すことにより、継承に向き合う新しい環境が生まれ、人々の交流が深まったのである。

地域文化の継承は、かつてとは異なるコミュニティのあり方に課題をもつ場合が多い。芸能が盛んな沖縄でも、故郷を離れて生活せざるをえない人が多く、地元だ



古見の結願祭



舞踊の後継者育成のようす

けでは継承が難しい。次世代育成に新しいアプローチを取り入れながら、芸能を通じて人々の結びつきを作り直している古見公民館は、芸能に限らず、各地域固有の課題に向き合うためのモデルケースになるだろう。

プログラムオフィサーのコメント

初めて古見公民館で後継者育成の現場を拝見したときの感動は忘れられません。中学生2名とそのお母さん、事業の統括者、地元のおばあさんの5名。たった一人に向けてでも継承していくという思いが、古見の芸能の豊かな歴史を未来へつなぐのだと知りました。研究者との協力や記録のデジタル化を実際の育成へ結びつけるのは、この小さな場を支える「人の思い」であることを、文化振興は忘れてはいけないと痛感しています。(林 立騎)

活 動 詳 細

- ①地域に残る祭事の記録(カセットテープ、スライドネガ、映像、工工四)と情報の整理
- ②沖縄県立芸術大学の協力による音源・映像・スライドネガのデジタル化
- ③整理した資料をもとにした地謡教習の補助用工工四の作成
- ④作成した工工四を活用した地謡の育成
 - ・地域での稽古
会場:古見公民館(竹富町)
 - ・結願祭での演奏
会場:古見公民館
 - ・第19回竹富町民俗芸能発表会での演奏
会場:中野わいわいホール(竹富町)

与那国民俗芸能の継承に向けた調査、 及び人材育成計画策定事業

一般社団法人 与那国フォーラム

住 所 与那国町字与那国1107

メール yonaguniforum@gmail.com



与那国島の伝統芸能「道唄(みていうた)」

目指すのは継承の仕組みの再構築

与那国島には各集落に、踊座、棒座、狂言座など「座」と呼ばれる芸能継承組織がある。与那国の芸能の継承はこの「座」と、戦後に組織された「与那国民俗芸能伝承保存会」が中心となって行われてきた。1985年には「与那国島の祭事の芸能」として国の重要無形民俗文化財指定を受けるなど、当時は世代間での継承も円滑に進んでいた。しかし近年は、芸能指導者層の高齢化や人口減少等による後継者不足により、継承が危ぶまれる状況となっている。そこで与那国島歴史文化交流資料館（DiDi与那国交流館）の運営にあたる与那国フォーラムでは、与那国島の芸能継承の仕組みの再構築を手助けすべく、平成28年度よりさまざまな取り組みを実施してきた。

調査には70歳代の芸能指導者たちも参加

まずは与那国島内の芸能継承の現状について聞き取り調査を行った。その結果、舞踊と地謡においては70歳代中心の指導者層と30～40歳代の実演者層が担っており、次期指導者となるはずの50～60歳代がほとんど関わっていないことなどの課題が明らかになった。続けて与那国島と同様に国の重要無形民俗文化財指定を受けている竹富島、小浜島など八重山地域の他の島も

調査した。今年度の竹富島での再調査には、これまでも調査に参加してきた30～40歳代の現役世代に加え、70歳代前後の指導者たちも参加した。これは、継承の仕組みの再構築がある程度進んだ後は、芸能に関わる方々自らその仕組みを実践してもらうため、情報や問題意識の世代間の共有をすすめてほしい、という思いからだ。参加した指導者が「芸能が披露される会場全体の一体感のある雰囲気深い感銘を受けた」と実感のこもった感想を述べるなど、調査が今後の継承にかされることが期待される。

積極的に設けられた勉強会と交流の機会

調査に加え、島内での勉強会や情報交換・交流の機会も積極的に設けられた。2018年8月には竹富島、小浜島、西表島から芸能の継承に関わる指導者らを招いて座談会を開き、「いかに幼少期から芸能に親しみを持ってもらおうかが大事」、「地謡の後進育成こそ急務」など活発に意見が交わされた。12月には、岩手県一関市の郷土芸能「鹿踊り」の継承者で、現在は全日本郷土芸能協会の理事でもある小岩秀太郎氏を講師に迎えた講演会が行われた。2019年1月には、竹富島生まれで沖縄の芸能が専門の狩俣恵一沖縄国際大学特任教授と、与那国島生まれの琉球舞踊安座間本流「清風一扇会」久手堅一子会主を迎えた講演会とワークショップを開催。いず



各島の芸能指導者達が活発に意見を交わした座談会

れも各世代の継承関係者が多く参加した。

継承について他の島の力も借りて考える 「芸能交流会」

2月には、八重山地域の中でも集落ごとの芸能継承が特にうまくいっていると言われる竹富島から30名を超える実演者を与那国に招き、昨年に続いて2回目となる「芸能交流会」を開催。双方の島の舞踊や狂言が披露された。これに向けた稽古や舞台進行の段取りまで含め、他の島の芸能継承の在り方に間近に触れ、課題解決に向けた意見交換の場が持たれる絶好の機会とあって、継続を望む声が多く寄せられている。与那国フォーラムと関係者の間では、補助事業終了後も交流会を継続する方法について具体的な検討が始まった。与那国の芸能継承の動きは、再び熱を帯び始めている。

プログラムオフィサーのコメント

「芸能交流会」では、島の行事で若手が踊る機会が少なくなっていた集落も、若手による舞踊の披露を実現させました。この集落の芸能指導者は「久しぶりに若い人が揃ってくれた。竹富から大勢をお迎えした場で舞踊を披露することができて本当に良かった」と話していました。これをきっかけに団結した若手メンバーは「日本最南端！八重山の海びらき2019 in 与那国」の大きなステージで踊ることを決めるなど、継承に向けて動き始めています。(林 恭子)



「芸能交流会」で熱心に舞台を見つめる親子

活 動 詳 細

①勉強会の開催

- ・舞踊・地謡師匠勉強会開催
- ・舞踊・地謡座談会開催
- ・竹富島種子取祭調査報告会
- ・民俗芸能の継承に関する講演会・座談会
- ・狩俣恵一講演会・久手堅一子ワークショップ「与那国島芸能の魅力と可能性」
- 各会場: DiDi与那国交流館(与那国町)

②竹富島との芸能交流会開催

会場: 与那国町立与那国中学校(与那国町)

③教習の場の提供

与那国町西自治公民館踊座に対して、祖納豊年祭の教習場としてDiDi与那国交流館内「唄ラボ」を提供

④芸能交流会に関する先進事例調査の実施

沖縄県内で文化事業においてクラウドファンディングを実施し成功した事例について調査

⑤事業報告書及び人材育成計画書作成のため、

資料準備及び出版社との打ち合わせ
来年度発行予定の報告書・人材育成計画書の構成や編集スケジュールを調整

次世代を担う八重山芸能後継者 育成支援事業

合同会社 白保企画

住 所 石垣市字白保70-2

メール shirahokikaku@gmail.com

URL https://piron.ti-da.net/c292565.html



第3回琉球芸能鑑賞会（石垣市民会館）



呉屋かなめ氏による舞踊の稽古のようす



花城英樹氏による歌三線の稽古のようす

芸能の鳥々の課題

「歌と踊りの鳥」として知られる八重山は、子どもたちの芸能においても突出している。地元の3高校は沖縄県代表として全国高校総合文化祭の郷土芸能部門に出場する常連校だ。幼少の頃から地域行事の中で伝統芸能に触れる機会が多いからこそ育まれている能力だろう。

しかし八重山芸能は高校卒業後に断絶ができてしまう。石垣島を離れると、芸能からも遠ざかる。芸能を学び続けるための進路としては沖縄県立芸術大学があるが、そこで学ぶのは主に琉球芸能で、八重山芸能も県指定無形文化財だが、専門的に学ぶことは難しい。その県立芸大でさえ、近年では八重山からの進学者が減少している。芸能の後継者不足は全県的に深刻で、八重山芸能も例外ではない。

継続的な育成と議論のために

こうした状況の中、白保企画は、平成26年度から3年間「沖縄文化活性化・創造発信支援事業」を、さらに平成29年度からは環境形成推進事業を活用して後継者育成を進めてきた。継続している取り組みは主に二つ。一つは、八重山の子どもたちが異文化である琉球芸能と出会い、その刺激の中で学び、発表する機会としての「琉球芸能鑑賞会」の開催と、その自走化に向けた取り

組み。もう一つは、八重山芸能の現状と未来を巡って研究者や実演家を招いた講座と座談会を実施し、その成果を地域における議論の基盤とする活動だ。

琉球芸能鑑賞会に向けては、呉屋かなめ氏（琉球舞踊）や花城英樹氏（古典音楽）といった指導者を沖縄本島から迎え、10年後、20年後に子どもたちが同じように熱心な八重山芸能の指導者になる未来を見据えて活動している。今年度は石垣島だけでなく、竹富島と小浜島から通う参加者も含めて、舞踊38名、歌三線11名の49名が厳しい稽古を続け、鑑賞会で成果を披露した。

芸能を巡る議論も極めて深い。八重山芸能は本来は農耕社会の一面であり、農耕のサイクルの中で神に向け、祈りの心とともに演じられていたが、現代ではその基盤が大きく変わったことをどう考えるかという根本的な問いから出発して、後継者育成について多面的に議論し、成果は報告書として配布され、ウェブ上でも公開された。

現代社会はどのように 芸能を受け止められるのか？

平成30年度に3回目を迎えた琉球芸能鑑賞会は、石垣市民会館に800名を超える観客を集めた。多くの子どもたち、親子、家族連れ、高校生のグループが芸を見守るようすからは、地域にすぐれた芸能の継続的な教習と発

表の場があることを喜び、それをこれからも求める声と思いがあることが、たしかに感じられた。

子どもたちがさらに能力を伸ばし、実演家や指導者になろうとするとき、あるいは土地を離れても学び続けたいと思うとき、現代社会にどのような受け皿をつくることができるだろうか。早急に結論づけるのではなく、育成と議論を粘り強く続ける白保企画の活動は、歴史と現実を真摯に引き受けているからこそ、誰もが当事者として考え、深めることのできる大切な問いを発している。

プログラムオフィサーのコメント

白保企画の活動は、文化の原点を教えてください。西洋語のカルチャー（文化）とは、「土の耕された場所」を意味し、文化も土のように耕し続けねばならないことを含意しています。子どもたちと土地の成長を見守ることが文化の原型だと思います。子どものことを考えることで、大人のすべきことを知り、子どもたちや文化を無理に行政に寄せるのではなく、その土地にふさわしい自然な文化振興が大切だと、いつも思い出させてもらえます。（林 立騎）

活 動 詳 細

- ①「琉球芸能ワークショップ」の開催
小・中・高校生を対象に、芸能への入口として、また八重山芸能とは異なる琉球芸能の体験の機会として実施
会場：大浜公民館（石垣市）
- ②「琉球芸能鑑賞会」に向けた稽古の継続
会場：白保公民館（石垣市）
- ③「琉球芸能鑑賞会」の開催
会場：石垣市民会館（石垣市）
- ④「琉球芸能鑑賞会」の自走化に向けた検討
- ⑤八重山芸能の課題について議論した「座談会」「連続講座」の報告書を作成

映画を通じて異文化理解を深め 沖縄の才能を育てる映画祭〈KIFFO〉の 長期運営基盤作りと、自発的に行動する 人を育てるワークショップ関連事業

株式会社 ククルビジョン
住 所 那覇市泉崎2-4-20 301
メール kiffo@kukuruvision.com
U R L https://kukuruvision.com/kiffo/



子どもスタッフ、大人ボランティアスタッフ大集合！



映画祭で来場者を出迎える子どもスタッフ



映画祭会場ロビーに掲げる特大ポスターもみんなで手作り

自身の経験から、子ども映画祭を企画

「子ども国際映画祭 in 沖縄〈KIFFO〉（以下、KIFFO）」運営事務局の代表で映画祭ディレクターの宮平貴子氏は、自身の学生時代に関わった映画祭に影響を受けたことがきっかけで、子どもが主体となる映画祭を開催しようと考えたという。「映画の主人公の子どもの目線を通し世界を知ってもらおう」、「映画祭の運営を通じて年代を超えた人とのつながりを築く」ということが大きな目的にあり、柔軟に学べる子どもの時の経験が、大人になる過程において豊富な選択肢を導き出すとの熱い思いからだ。運営を担う「子どもスタッフ」は、多感な小学校4年生から中学生から募集する。

役割ごとのチームでワークショップを 積み重ねて準備し、広報活動も自ら 積極的に挑戦

6月には11月の映画祭開催にむけて、「子どもスタッフ」に応募があった子どもたちを対象にしたワークショップを開始した。ワークショップでは、制作、受付、誘導、司会など、運営するために必要な役割を細かく設定。役割にあわせて子どもたちがチームを築き、来場者にとって嬉しいこと、喜ばれること、そのために必要な役割業務とは何かを話し合い、提案していく。過去

に参加した経験のある子どもたちがリーダーシップを図り具現化していくことで、大人の手が離れた、子どもらしいアイデアが生まれているのが印象的だ。

記者会見やラジオ出演などの広報活動も「子どもスタッフ」自ら実施するのも、子どもたち運営の映画祭ならではの。記者会見では、「小さな子どもが遊べるゾーンを作り、笑顔で接することを心がけます（装飾チーム）」、「一人でも多くのお客様が来ていただけるように、KIFFOの活動を広めたいです（広報チーム）」などチームごとの意気込みを見せた。

海外2作品の吹き替え作業は 県内役者が活躍

映画祭で放映する選定された海外作品の吹き替えは、県内で吹替作品を制作している。声の出演は、県内で活躍する役者やオーディションを勝ち抜いた声優たち。テレビでも活躍する矢嶋晶子氏が指導した。子どもが理解しやすい演出と、ずっと物語に入り込める声優の技術はレベルが高く、スタジオでの制作も県内で十分行えることが分かったこともこの事業を通した一つの成果だ。

映画祭当日も団結したチームワークで 成功裏に終了

映画祭当日、会場は、前日のワークショップで制作したバルーンアートや垂れ幕で飾り付けがされていた。映画祭の本祭は、子どもたちのワークショップの成果発表の場でもある。チケットのもぎりから誘導、放映前の司会による作品紹介、映画を観るときの心得（ルール）なども自ら考え、出演してビデオにまとめた。観る側を飽きさせないように子どもたちのアイデアが詰まった映画祭は、作品もさることながら、多くの方の記憶に残る映画祭となった。

プログラムオフィサーのコメント

KIFFOは、今年で5回目の開催を向かえました。子ども国際映画祭を過去5年間継続開催するという事は、少数精鋭で運営するククルビジョンとして、非常に苦労があったのではないかと思います。賛助会員制度など、運営の土台を支えるパートナーが根付いてきていることも特徴で、その取り組みは県内でも先進的。もともとは「子どもスタッフ」だった子どもたちが成長し、大人ボランティアスタッフに混ざって高校生スタッフ「10プラス(テンプラス)」として映画祭やワークショップのサポートをしているのも、今後のKIFFOの発展を期待できるものだと考えています。(島袋)

活 動 詳 細

- ①子ども実行委員会の運営、成果発表
本祭でのオープニングセレモニー、会場装飾
会場:パレット市民劇場(那覇市)
- ②子ども審査員を募集し、審査に挑戦
- ③親子で動画づくりワークショップ
会場:那覇市若狭公民館(那覇市)
- ④ボランティアスタッフ育成
・ファシリテーション講座
・自尊感情を育むための境界線講座
各会場:那覇市若狭公民館
- ⑤吹き替え作品制作
・吹き替え台本の翻訳、オーディション録音、吹き替え版
予告編製作
・成果報告(トークイベント)開催
会場:パレット市民劇場

わたした島子どもアート

一般社団法人 エーシーオー沖縄

住 所 那覇市首里汀良町3-82-5-2F

メール umi@acookinawa.com

URL https://www.aco-okinawa.com/



会場のお客さんと一緒にカチャーシー



子どもたちの想像力をかきたてた『レッド君のもくようび』



子どものための事例と意見交換が行われたシンポジウム

沖縄のすべての子どもたちに演劇を届ける

エーシーオー沖縄は、毎年夏に那覇市を中心に「りっかりっか*フェスタ（国際児童・青少年演劇フェスティバルおきなわ）」を開催し、県内の子どもたちに世界の優れた児童青少年対象の舞台芸術作品を鑑賞できる機会を提供している。子どもたちが豊かな感性を育むために、文化芸術に触れる機会には必要だが、現実的には那覇近郊とそれ以外の市町村・離島での文化活動には差があり、特に現代の子どもたちに向けて創作されたコンテンツポラリーな作品に触れる機会はとて少ない。

本団体は離島を含む那覇市以外の地域にも優れた舞台芸術を届ける取り組み「わたした島子どもアート」を平成29年度からスタートさせた。

地域コーディネーターと連携し企画開催

「わたした島子どもアート」ではいずれも地域の子ども文化事業に携わっている関係者がコーディネーターとして、会場選びや広報活動、当日の会場設営などを行っている。こうして現地をよく知るコーディネーターが企画することで、子どもたちが気軽に集まれる生活圏内で、舞台芸術を鑑賞する機会づくりにつながっている。

開催地を拡大、初の離島公演

昨年度は夏に名護市と沖縄市で子どもたちのための舞台公演を行った。継続開催への期待が高く、次年度のための他地域を対象としたヒアリングでは、離島からも開催希望の声が上がったことをうけ、平成30年度には名護市、沖縄市のほかにうるま市、石垣市、宮古島市と公演の場を広げた。

初開催となったうるま市では、地域の保育園や学童クラブからの申し込みが多く、追加公演を開催。また、初の離島公演となった石垣市、宮古島市では、日頃地域の伝統芸能に触れる機会が多くても、このような子ども向けの舞台芸術鑑賞の機会が少ないという背景もあり、ニーズが高く、来年度も継続公演が期待されている。

冬の「わたした島子どもアート」では、「わらべうた」をテーマに南城市の保育園で語りをまじえたコンサート形式の公演を行い、子どもたちをはじめ、保護者や地域のおじいちゃん、おばあちゃんたちと歌い継がれるわらべうたの魅力を再発見した。

専門家を招いてのシンポジウムを開催

7月に那覇市では、「すべての子どもたちのために」をテーマに、シンポジウムを開催した。子どもを対象とした舞台芸術を中心に活動している専門家が、障がい者を含むすべての子どもたちへどのように舞台芸術を届けるかを話し合った。「りっかりっか*フェスタ」内で開催されたこともあり、国際色豊かな参加者と積極的に意見交換を行った。

エーシーオー沖縄では、本団体が持つ経験を沖縄県全域で提供できるように、地域との連携をさらに強化し、継続公演開催をめざし、活動を続けていく。

プログラムオフィサーのコメント

目の前で展開していく絵に一喜一憂する離島公演での子どもたちの反応が忘れられません。鑑賞の機会は少なくとも、それだけ貴重な瞬間がたくさん生まれることを感じます。より多くの子どもたちがそういう体験の機会に恵まれることを願っています。(新城)

活 動 詳 細

- ①『レッドくんのもくようび』公演開催
会場:くすぬち平和文化館(沖縄市)、うるま市生涯学習・文化振興センター ゆらてく(うるま市)、名護市労働福祉センター(名護市)、富名腰コミュニティセンター(宮古島市)、大浜公民館(石垣市)
- ②わたした島子どもアート シンポジウム開催
「すべての子どもたちのために」
会場:那覇市緑化センター(那覇市)
- ③次年度開催地の調査(南城市、与那原町)
- ④「うたたい もーたい うちなーぬ わらべうた」公演
・沖縄の昔ばなし「クスケーのゆらい」
・沖縄の踊り
・沖縄のわらべ歌
・沖縄の今の歌
会場:あおぞら福祉会 あおぞら第2子ども園(南城市)
- ⑤「わたした島子どもアート」
地域コーディネーター連絡会議開催
南城市で30年度の活動の振り返りと次年度に向けた意見交換の実施

まちなかコンサートを活用した 芸術文化発信事業

特定非営利活動法人 琉球交響楽団

住 所 浦添市安波茶1-31-1 伊波ビル202

メール ryukyu.sym@gmail.com

URL http://www.ryukyusymphony.org/



宮古島市公設市場でのまちなかコンサートのようす

もっと身近にクラシック音楽を!

琉球交響楽団は「沖縄の地に本格的なプロのオーケストラを作り育てたい」と集まったメンバーで2001年に発足、現在36名の団員が所属している。

沖縄県では都市部を中心に、数多くのクラシックコンサートが開催されているが、離島などでは生演奏でクラシック音楽を鑑賞する機会が都市部に比べて少ない。なぜなら、離島地域へのオーケストラ訪問コンサートは渡航費・宿泊費と費用がかさんでしまうからだ。そこで、平成29年度より環境形成推進事業を活用し、弦楽四重奏や管楽器アンサンブル、小編成（13名）から室内オーケストラ（23名）までフレキシブルに対応できるアウトリーチプログラムを考案。多くの県民にクラシック音楽を届け、身近に楽しんでもらうための取り組みを展開している。

平成29年度は国頭、伊是名、宮古島、石垣島の4地域でクラシック音楽の出前コンサートを行った。開催地の自治体、学校、文化協会、マスコミとの協力体制を構築することができた。

宮古島では、吹奏楽指導を行った宮古地区吹奏楽連盟から今後も継続的な講習会開催の要望があった。

琉響フェスティバル in 宮古島

平成30年度は宮古島で地元参加型まちなかコンサートを企画。昨年度築いたネットワークを活かし、地域の人々と連携し音楽活動が継続できるよう、実演団体及び地元ボランティアの育成を図り、基盤づくりに力をいれた。

事業の一環として市内小中高校の生徒を対象に事前に吹奏楽講習会を行い、技術の向上をはかった。発表の場としてマティダ市民劇場にて琉球交響楽団室内オーケストラとウェルカム演奏・合同演奏を行った。

「琉響フェスティバル in 宮古島」(1/18~1/20)では、子ども向けの手作り楽器体験ワークショップを開催し、身近な材料を使って楽器製作をし、さらに本物の楽器も吹く体験をしてもらった。

期間中に宮古島市内13ヶ所の会場で「まちなかコンサート」を開催し、ホール以外の既存の施設にて演奏をした。銀行では待ち合い時間で、病院では外に出かける機会の少ない患者さん、公設市場やショッピングセンターでは買い物中や通りすがりに足をとめていただき、多くの方々に音楽を届けることができた。会場によっては一緒にくちずさんだり、指揮をはじめたり、ダンスを踊り出したりと思いきいに楽しんでいただいた。中には全ての会場をまわって、団員と顔見知りになった方もいらした。

「ふれあいコンサートin宮古島」終了後にはご来場い



ふれあいコンサートで地元中高生と合同で演奏



子ども向け手作り楽器体験ワークショップのようす

ただいた方々から「楽しかった」という言葉を多くいただいた。

沖縄を代表するオーケストラへ

琉球交響楽団は沖縄を代表するオーケストラとなることを目標にかかげ、活動を県内外に発信して、認知度を上げ、行政や企業との連携にさらに力を入れていく。受託公演数は平成28年度42件、平成29年度66件、団体会員が4社から46社、個人会員は172名から249名と増加し、琉響の活動に支援者が増えたことが目に見える。今後さらに沖縄にクラシック音楽が根付くよう、地域に密着した県民に愛されるオーケストラを目指し活動を続けていく。

プログラムオフィサーのコメント

琉球交響楽団の近年の活動は目覚ましく、昨年行われたオペラ公演での演奏や元県知事の県民葬での献楽(演奏)を務めるなど、着々と県民のためのオーケストラへの道を歩んでいると感じています。創立17年のまだ若いオーケストラではありますが、定期演奏会では、オリジナリティーのあるプログラムに新しい挑戦がみられ、今後の発展に期待が寄せられています。(新城)

活 動 詳 細

①吹奏楽講習会開催

会場:宮古島市立平良第一小学校、宮古島市立平良中学校(宮古島市)

②「琉響フェスティバル in 宮古島」を開催

・まちなかコンサート

会場:島の駅みやこ、宮古病院、あたらす市場、沖縄銀行宮古支店、徳洲会病院伊良部診療所、沖縄海邦銀行宮古支店、宮古島徳洲会病院通所リハビリテーション、琉球銀行宮古支店、宮古島市役所、宮古島市公設市場、ゲオ宮古店、ショッピングタウン宮古(宮古島市)

・手作り楽器体験ワークショップ開催

会場:宮古島市文化ホール(マティダ市民劇場)(宮古島市)

・ふれあいコンサート in 宮古島開催

会場:宮古島市文化ホール(マティダ市民劇場)

琉球料理をツールとして、 沖縄の魅力を国内外に発信できる 子どもたちを育成するプロジェクト

RYUKYU カマDo! プロジェクト

住 所 那覇市寄宮2-5-8
リブラハウス303号室(よんなーフード内)
メール info@ryukyu-kamado.com
URL http://ryukyu-kamado.com/



沖縄ガス ショールーム「ゆ〜くる」にて料理講座

琉球料理継承の危機

琉球料理は、他地域の料理と比較しても独自性をもった食文化の一つである。しかし近年、欧米食や複数の国の料理を組み合わせた料理などの影響を受け、また家庭で琉球料理を作る機会が減少した背景もあり、琉球料理離れが加速している。

企業と連携したプロジェクト

こういった沖縄の食文化に危機感をもった県内企業の有志メンバーで琉球料理普及継承を目的とした委員会を設立。平成29年度から名称を「RYUKYUカマDo! プロジェクト定期委員会」に変更し、現在は月に一度、委員会を開催している。

平成29年度は、県内中南部北部の小・中学校計9校に琉球料理と沖縄文化に関する意識調査を実施。その他、「霧島食育研究会」(鹿児島)の郷土料理普及継承を目的とした取り組みや、農林水産省主催の「和食王選手権」(東京)を視察・ヒアリング調査を行った。その調査をもとに、琉球料理の普及のためには、沖縄の将来を担う子どもたちが琉球料理だけでなく、沖縄の歴史や伝統文化に触れる機会を増やすことが必要だと考え、子どもが興味を持ちやすい「料理」をツールに沖縄の歴史や文化を学ぶ教育プログラムが有効な手段になると

確信し、カマDo! 塾を考案した。

新しい学びの場「カマDo! 塾」

「カマDo! 塾」は、琉球料理の背景を知った上で、一品だけでもきちんと作れるようになり、食を通して沖縄の魅力を国内外に発信できる人材を育てることを目標としており、県内の小中学生を対象としている。

平成30年度は全4回の無料体験講座を実施。初対面の子どもたちがコミュニケーションを取りやすくなるよう、場を和ませるためのゲームなどを行う「アイスブレイク」から始まり、「歴史講座」、「料理講座」のあと、グループワークショップを通して「アウトプット」を行う基本カリキュラムを確立。テーマは「ふちゃぎ」(旧暦の8月15日に食べられるお餅)や、琉球料理に欠かせない豚肉料理として「中身汁」などの行事料理を扱った。その他にも、沖縄の食文化に欠かせない「いも」をテーマとした農業体験講座や、県立博物館で展示物をみながら食文化を学ぶ講座など、カリキュラムのブラッシュアップ、プログラム開発も行った。

グループワークショップには、アクティブラーニングプログラムに定評のある「がちゆん」、また、歴史講座には琉球歴史家として県内で広く活動している賀数仁然氏を講師に起用するなど、プログラムをさらに充実させた。



南城市大里の「みどり農園」にて農業体験



「おきなわ花と食のフェスティバル2019」にて成果発表

沖縄の魅力を発信できる「伝える力」を育てる

カマDo! プロジェクトでは、歴史や料理をただ学ぶのではなく、学んだことを他者に伝えていくことこそ、このプロジェクトの目指す人材育成として、アウトプットのためのグループワークには特に力をいれており、「伝える力」を育てることを大切にしている。1月にはカマDo! 塾で学んだ成果発表として、「おきなわ花と食のフェスティバル2019」のメインステージで約20名の子どもたちが成果発表を行った。

今年度は、事務局の運営体制も強化しながら、ワークショップも担える人材育成にも取り組んだ。今後より多くの子どもたちに学びの機会を増やすために、講座のエリア拡大を目指している。

プログラムオフィサーのコメント

体験講座では回を重ねるごとにリピーターが増え、理解者を広げながら、子どもたちや保護者とも信頼関係を築きつつあります。また、県内大手の食流通企業からの協力体制は、大きな力となっており、イベント開催時には、食材・会場の提供のほか、委員会メンバーがスタッフとなって運営を支えています。今後もネットワークをさらに広げ、活動が継続発展し、多くの子どもたちにとってよき学びの場になることを期待しています。(新城)

活 動 詳 細

- ①本団体の運営体制を強化するための人材育成
- ②「カマDo! 塾」無料体験講座の開催
 - ・RyukyuカマDo! プロジェクト 無料体験講座
 - 第1回「沖縄で大切にされている行事とそれにまつわる食について」
 - 会場：沖縄ガス本社 ショールーム「ゆ〜くる」(那覇市)
 - 第2回「おきなわの生活にまつわる食文化」
 - 会場：沖縄県立博物館・美術館(那覇市)
 - 第3回「おきなわの農業と食を知る」
 - 会場：みどり農園(南城市)
 - 第4回「おきなわの正月の過ごし方&カマDo! 塾1年総集編」
 - 会場：沖縄ガス本社 ショールーム「ゆ〜くる」
 - ・体験講座の募集告知・広報活動
 - 体験講座を通した課題の洗い出し、プログラムの進め方やカリキュラムの内容を精査
- ③受講生の成果を広くPR
 - 「おきなわ花と食のフェスティバル2019」にて成果展+ステージ上で子どもたちによるプレゼンテーションの実施
 - 会場：奥武山公園(那覇市)

④RYUKYU カマDo! プロジェクト定期委員会開催

三線文化の普及連携事業

沖縄県三線製作事業協同組合

住 所 那覇市安里360-7 和光マンション1F

メール info@okinawa34.jp

URL http://okinawa34.jp/



三線職人が愛好者の悩みを直接聞くメンテナンス会

三線文化の将来に危機感を持った組合は、三線を末長く愛好してもらうことにつながりたいと、三線の歴史や文化も含め、沖縄県産三線の魅力について職人の立場から発信していくことを決めた。

演奏家や愛好者との新たな接点を求めて

新たな発信の取り組みとして、演奏家や愛好者が多く集まる「第81回沖縄芸能大会」（川崎市）、「第44回八重山古典民謡コンクール発表会」（石垣市）と連携し、会場内での県産三線の展示、実物の部品と写真パネルによる製作工程の説明、メンテナンス相談会などを実施した。愛好者でも普段なかなか三線職人と接する機会は少なく、メンテナンス相談会は特に好評だった。また、演奏会「琉球古典音楽の響」（浜松市楽器博物館）、「わしたショップ・西2丁目地下歩道でつながるフェア」（札幌地下街・オーロラスクエア）、「第81回沖縄芸能大会・文化講座」（川崎市教育文化会館）、「沖縄フェア」（イオン札幌平岡店、イオン新さっぽろ店）では、三線の展示などに加え職人による講話会を実施。三線の歴史と文化、沖縄県産三線の現状について広く伝える機会となった。

沖縄で急速に増加した 外国産の三線

沖縄県内で保有されている三線の数、平成28年度に三線組合が実施した調査で約82万挺であることがわかった。20年前の調査では約50万挺だったのと比較して大幅に増加している。要因としては、いわゆる「沖縄ブーム」を契機に沖縄のさまざまな文化が注目される中で、沖縄民謡や琉球古典音楽に限らず、沖縄発のポップス音楽などで多くの人が三線の音色に触れ、自ら演奏する愛好者が増えたことがあげられる。ただし、82万挺のうち75%は、比較的安価で購入できる外国産であることも同時にわかった。外国産の三線は、ネット通販や沖縄土産物店などで急速に販売数を伸ばしていった。

三線文化の将来への危機感からの決意

三線の演奏を習得するには、これまでは師匠のもとに通って稽古を積み、演奏だけでなく曲の背景や三線と沖縄の文化全般についても口承されるのが一般的だった。しかし、気軽に入手できる外国産の三線が流通し始め、自己流で演奏する愛好者が増えるにもなってそういった伝承も希薄になりつつある。一例として、三線はそれぞれの家で代々大切に受け継がれるものだったが、近年はゴミの日に捨てられることさえあるという。



講話会では映像も利用して三線の歴史と文化を解説



大好評だった札幌市内での三線体験

県産三線の魅力を発信する 県外拠点の立ち上げ

県外では、沖縄県産三線の魅力を発信するための拠点作りもはじめた。拠点の立ち上げに向けて全国各地の可能性を探る中で、札幌市近郊在住の複数の三線指導者の協力を得られることになり、沖縄物産のアンテナショップ「札幌わしたショップ」のイベントでの無料三線体験の実施にこぎつけた。続けて、イオン北海道の2店舗で同時に開催された「沖縄フェア」でも無料三線体験を実現。用意した席が全て埋まる回が続出し、北海道の皆さんの三線に対する関心の高さを確信した組合は、2019年2月、札幌市内で「札幌三線教室」を立ち上げた。この成功を足掛かりに、組合は今後、全国各地に三線教室などの愛好者の拠点を作り、沖縄県産三線の魅力発信、三線文化の普及にさらに励む意気込みだ。

プログラムオフィサーのコメント

2018年11月7日、沖縄の三線は国の伝統的工芸品に指定されました。三線組合は、2010年の法人化以来の悲願を成し遂げたのです。今後は後継者の育成や国内外の販路開拓、原材料の確保対策など、伝統的工芸品として受けられるさまざまな支援の可能性が広がること。これを機に、ますますがんばれ、三線組合!! (林 恭子)

活 動 詳 細

- ①三線コンクール、芸術祭、演奏会等でのメンテナンス協力による職人と演奏家との連携強化
 - ・「第44回八重山古典民謡コンクール発表会」
会場：石垣市民会館(石垣市)
 - ・「第81回沖縄芸能大会」
会場：カルツかわさき(川崎市)
- ②演奏会やイベント等での沖縄県産三線の歴史と文化の講話
 - ・「琉球古典音楽の響」
会場：浜松市楽器博物館(浜松市)
 - ・「札幌わしたショップ・西2丁目地下歩道でつながるフェア」
会場：札幌地下街・オーロラスクエア(札幌市)
 - ・「第81回沖縄芸能大会・文化講座」
会場：川崎市教育文化会館(川崎市)
 - ・「イオン北海道・沖縄フェア」
会場：イオン札幌平岡店、イオン新さっぽろ店(札幌市)
 - ・「札幌三線教室」
会場：札幌市民交流プラザ(札幌市)
- ③愛好者の拠点づくりの基礎調査
- ④愛好家の拠点づくりにおけるモデルプログラム(無料三線体験等)の実施
 - ・「札幌わしたショップ・西2丁目地下歩道でつながるフェア」
会場：札幌地下街・オーロラスクエア
 - ・「イオン北海道・沖縄フェア」
会場：イオン札幌平岡店、イオン新さっぽろ店

地域の8mm映画 オープンデータ実証実験による デジタルアーカイブ・ネットワーク推進事業

株式会社 シネマ沖縄

住 所 島尻郡南風原町字宮平585 福まる店舗3階

メール info@cine-oki.jp

URL http://okinawa-archives-labo.com/



与那原町での上映会のようす

家庭に眠る8ミリフィルムを 地域の記憶へ

シネマ沖縄のプロジェクト「沖縄アーカイブ研究所」では、環境形成推進事業を活用して沖縄の一般市民が撮影した8ミリフィルムを収集し、デジタル化して公開することにより、地域の記憶の発掘と共有を進めている。

市民の撮影した8ミリ映像は、貴重な歴史の記録であるにもかかわらず、県内では組織的な収集と保存が行われてこなかった。多くの映像は撮影から30年以上を経てフィルムの劣化や廃棄が進んでいる。本事業は、上映会の開催やウェブ上の公開など「利活用」を工夫し、市民の記録を記憶として共有する手法を開発しながら、アーカイブへの理解を広げている。魅力的なアクションによって市民や協力者とのネットワークを形成しているのである。

図書館で、ウェブ上で、 地域の記憶に参加する

平成29年度からは、県内の公立図書館と連携してデジタル化した8ミリ映像の上映会を開催、平成30年度は11館の図書館上映ツアーを実施した。開催地に合わせて毎回プログラムを変更し、基本的にサイレントムービーである家庭の8ミリ映像にシネマ沖縄の真喜屋力氏

が内容や撮影者について活弁士のように解説を加えながら、不明な点は集まった観客に話を聞き、その場でリサーチを深め、アーカイブを充実させていく。こうした「参加型のアーカイブ」は全国的にも先駆的な取り組みと言えるだろう。

同時に「沖縄アーカイブ研究所」のウェブサイトでは、映像公開ページ「FILMS」を運営し、月に5～15本を発信している。ウェブ上でも、これまでのリサーチの成果や、地図情報、古い新聞記事のスキャン、映像のキャプチャ画像などを駆使して、形式的な公開ではなく、アーカイブが深まるプロセスを共有している。

また、家庭に眠る8ミリフィルムだけでなく、沖縄関連の所有者不明のフィルム、いわゆる“孤児作品”の調査も並行している。中でも、沖縄からハワイへの移民者が1932年（昭和7年）に撮影した35ミリ記録映画『沖縄縣の名所古蹟の實況』に関しては、研究者等の協力を仰ぎながら、沖縄と海外をつなぐ記憶の痕跡を辿っている。

デジタルアーカイブ・ネットワークの 継続的發展へ向けて

シネマ沖縄の事業を軸として、平成29年度には「沖縄デジタルアーカイブ協議会（以下、ODAC）」が発足した。これはすでにアーカイブに関連する優れた仕事を続けてきた民間の事業者、研究者、公的機関の有志が集



今はなき中城城跡公園遊園地、1970年頃（8ミリ映像より）

まって生まれたものだ。

シネマ沖縄「沖縄アーカイブ研究所」は、引き続きODACと連携しながら、ワークショップ、セミナー、シンポジウムを開催し、県外の上映会や学会に参加している。2019年1月には東京大学の渡邊英徳教授を迎え、沖縄と広島を例にアーカイブと行政と市民の関係を問いかけたシンポジウム「消えるアーカイブ、育てるアーカイブ」を開催した。このようにして、国内外の情報を収集しながら、市民が地域のアーカイブに参加し、沖縄からの文化資源の発信をともに考え、模索するための環境を日々整えている。

プログラムオフィサーのコメント

シネマ沖縄の事業は、アーカイブづくりとは人とアーカイブの関係そのものをつくっていくことなのだを教えてくれます。上映会では集まった地域の方から話を聞き、ウェブ上での公開ではフェイスブックのコメント欄に情報が寄せられ、そうした中でどこかからまた古いフィルムが寄贈されます。アーカイブとは機械的な作業ではなく、それを人と共有するプロセスのことであり、だからこそこの事業のまわりには人が集まるのだと思います。（林 立騎）



県立図書館で開催されたシンポジウム

活 動 詳 細

- ①地域の8ミリ映像のオープン化
 - ・8ミリ映像の収集、保存、デジタル化、オープン化
 - ・ブログによる動画無料配信
 - ・孤児作品の許諾、公開、利活用に向けた調査
- ②沖縄県内各地域の図書館上映ツアーによる啓発活動
 - ・8ミリ映像の図書館ツアーなど、コンテンツの上映会
 - 図書館ツアー上映2018
 - 「懐かしの沖縄 8ミリ映画の記憶」
 - 会場：那覇市立首里図書館・那覇市首里公民館（那覇市）、中城村護佐丸歴史資料図書館（中城村）、恩納村文化情報センター（恩納村）、宜野湾市民図書館（宜野湾市）、北中城村あやかりの杜図書館（北中城村）、うるま市立中央図書館（うるま市）、宜野座村文化センター図書館（宜野座村）、糸満市立中央図書館（糸満市）、与那原町立図書館（与那原町）、読谷村立図書館（読谷村）、豊見城市立中央図書館（豊見城市）
 - ・各地のアーカイブと連携し、ワークショップの開発検討
- ③県外との連携のアプローチを行う
 - ・アーカイブサミットへの参加
 - ・国立国会図書館が開発中のデジタルアーカイブ「ジャパンサーチ」への参加に向けた働きかけ
 - ・海外への情報提供の呼びかけ
 - ・ゲストを県外からも招き、シンポジウム、セミナーを開催
- ④沖縄デジタルアーカイブ協議会と連携
 - ・既存のアーカイブとの連携強化
 - ・沖縄デジタルアーカイブ協議会の研究発表会、共同企画イベントへの参加
 - ・デジタルアーカイブ・シンポジウム
 - 「消えるアーカイブ、育てるアーカイブ～記憶と未来に繋ぐために～」
 - 会場：沖縄県立図書館（那覇市）

社会的課題に向き合う演劇ワークショップ プログラム研究・開発

株式会社 TEAM SPOT JUMBLE

住 所 宜野湾市宇字地泊751-7

メール info@spot-jumble.com

URL http://www.spot-jumble.com/



小学校での成果発表のようす



全身でお題を表現するジェスチャーゲーム



演劇ワークショップ体験相談会

体と心を解きほぐす

課題解決のための演劇ワークショップ

県内屈指の劇団として、舞台のみならず、テレビやラジオなどメディアで幅広く活躍しているTEAM SPOT JUMBLEは、平成23年度より学校教育現場での演劇を活用したワークショップの取り組みをはじめた。シアターゲームや演じること、創作することを通して、コミュニケーションを活性化させたり、学年・クラス内での課題の解決を円滑にしたりすることがねらいである。平成27年度からは、本補助事業の前身である「沖縄文化活性化・創造発信支援事業」の支援を受けて、ワークショップの進行役であるファシリテーターの養成に取り組んでおり、実際に複数名のファシリテーターを育て、現在までともに活動している。

さまざまな分野で

新しいプログラムを開発

活動を続ける中で、教育現場以外でも演劇ワークショップのニーズがあるとわかったことから、昨年度より本補助事業で「教育」に加え、「福祉」・「離島地域」・「企業の人材育成」という分野でのプログラム開発に取り組んでいる。継続的に実施・研究を重ねている案件に加えて、今年度は約12件のプログラムが新たに

つくられた。

教育分野では、県外の私立中学高等学校から依頼があり、沖縄での修学旅行で生徒が主体的に参加できるプログラムを考案した。また、県内の高校より、「ライフデザイン」をテーマにしたワークショップの依頼があり、「仕事・就職」に向き合うためのプログラムを検討。興味のある職業について調べ、その職業に就くまでのプロセスを短編の演劇作品で表現し、発表した。福祉の分野では、昨年度に引き続き、高校の福祉コースの生徒を対象にワークショップを開発している。レクチャーや話し合いを重ねたあと、生徒たちがファシリテーターとなって、福祉施設の利用者とともに、みんなで楽しめるゲームを行うものである。また、岡山県奈義町での菅原直樹氏（「OiBokkeShi」主宰）へのヒアリングや活動の視察を実施。その経験を踏まえて、新たに介護施設でのレクリエーションを研究している。

離島・地域の分野では、昨年度行った小豆島での「PAVLIC」による演劇ワークショップの視察をもとに、主に石垣市子どもセンターと協力しながら、プログラム開発を進めている。継続的に地域の課題解決に取り組むためには、地元の人々がファシリテーターの役割を担える仕組み作りも重要である。

演劇ワークショップを 多くの人に知ってもらおう

実際にワークショップを体験してもらったうえで、参加者が抱える課題をヒアリングする「演劇ワークショップ体験相談会」を開催。活動をより多くの人に深く知ってもらえるほか、潜在的なニーズの掘り起こしにもなっている。参加者が依頼者となり、プログラム開発に繋がっていくというケースもあった。

また、少しでも興味をもった人に向けて、パンフレットの作成に着手。ワークショップの内容や実施へのプロセスについて、わかりやすくまとめる。また、依頼に結び付きやすくするため、分野ごとに周知の方法を検討している。ワークショップのようすを撮影し、インターネット上で見られるようにする予定もある。また、新聞やラジオなど、メディアでの発信も積極的に行っている。

企業向け人材育成の分野ではニーズの掘り起こしが順調ではないなどの課題はあるものの、着実に県内で演劇を活用したワークショップへの認知は進んでいる。今後、さらなる期待や要望が増えることも想定され、ファシリテーターの確保と汎用性のあるプログラムの開発が求められている。

活 動 詳 細

- ①演劇ワークショップ体験・相談会の開催
会場：浦添市でこホール(浦添市)
- ②演劇ワークショップの説明用資料の作成
- ③「教育」「社会福祉」「離島・地域」「企業の人材育成」分野でのプログラム研究・開発
- ④岡山県奈義町での菅原直樹氏のワークショップ視察、研修
- ⑤演劇ワークショップ体験・事業報告会の開催
会場：石垣市健康福祉センター(石垣市)

プログラムオフィサーのコメント

ワークショップに同行する中で、参加者の表情が始まる前と終わった後で大きく変わるようすには、いつも新鮮な驚きを感じます。とくに、閉ざされた学校生活の中でさまざまな葛藤を抱えている子どもたちへの影響は大きいです。長年の劇団活動を通して培われた抜群のチームワークで、数多くの現場を抱えながらも、ファシリテーターとコーディネーターが一つひとつ誠実に向き合っています。(平岡)

移動式屋台型公民館を活用した 地域住民主体の「つどう・まなぶ・むすぶ」 創造拠点創出事業

特定非営利活動法人 地域サポートわかさ

住 所 那覇市若狭2丁目12-1 那覇市若狭公民館内

メール info@cs-wakasa.com

URL https://cs-wakasa.com/kouminkan/project/
parlor.html



パーラー公民館の普段の様子



石垣市子どもセンターでZINEのワークショップ



子どもたちの落書きが楽しい黒板テーブル

公民館が育む、地域コミュニティの自治力

戦争への反省から地域コミュニティの自治力を高め、民主的な社会をつくる社会教育機関として設置された公民館。沖縄に公立公民館が設置されたのは、1972年の本土復帰以降のため、他県に比べその数は少ないという。

那覇市若狭公民館の指定管理を受けている地域サポートわかさは、公民館の本来の役割である住民自治の力を育むことを目的に、本事業に取り組んでいる。事業名の「つどう・まなぶ・むすぶ」は、多様な主体が協働して地域課題に取り組む様をあらわした公民館用語である。

移動式屋台型公民館という試み

「曙地区に公民館がほしい」。そう声をあげたのは、曙願寿会の上原美智子氏だった。曙地区は、最寄りの若狭公民館まで大人の足でも1時間以上かかる公民館空白エリアの一つ。曙小学校が地域の集会場の役割を担っているが、自由に使える公民館を望む声は多い。しかし、公民館のどういう機能が必要かまでは自覚的ではなかった。ハードありきの発想ではなく、まずは公民館の「つどう・まなぶ・むすぶ」機能を実践することを地域コミュニティに提案し、この発想が受け入れられた。

このあたらしいソフト型公民館の設計と監修に、京都市立芸術大学教授の小山田徹氏をお迎えした。人が集い語り合う《出来事》をつくりだすアーティストとして全国的に活躍されている方だ。小山田氏は、まず人が集う場としてあけぼの公園に目を付けた。誰でも自由に往来できるオープンな“公共空間”で、地域の中心部にあったからだ。

簡易飲食店を指すパーラーから名前を拝借し、「パーラー公民館」と名付けた。パーラー公民館は、市販の脚立に黒板テーブルを置き、パラソルを立てたシンプルなもの、寄せ集め品で別の機能を生み出す「ブリコラージュ」という手法を用いている。この公民館の特徴は、どこにでも移動できることだ。

黒板製作は地元の大工さんをお願いし、パーラー公民館館長には呼びかけ人である上原氏に就任いただいた。2017年夏、城間那覇市長のテープカットにより、パーラー公民館が盛大にオープンした。

大切にしているのは「なにもしない」こと

ここでは基本的に「なにもしません」とパーラー公民館職員は口をそろえて言う。地域住民が自ら主体的に取り組む機会と環境を用意するのがその役目だからだ。集えばおのずと対話が生まれ、地域課題が持ち込まれるようになった。

ただ月に1回、アートワークショップをモデル的に実施している。これは、全国のアートNPOが開発したオープンソースのプログラムを用いていて、おもしろいと思ったら誰でも取り組めるものを選んでいく。今年度は、浜松市で活動するZINGの協力を得て手作りの小冊子「ZINE（ジン）」をつくるワークショップを実施、そのジンを集めた「ZINE KIOSK」をオープンさせ、地域の情報センター機能を追加した。ちなみに、このワークショップは、「おでかけパーラー公民館」と題して、曙地区にあるこども園や団地、石垣市の児童センターなどでも実施した。

こうしたパーラー公民館の“モビリティ”と“楽しさ”が、地域の多様な主体のつながりづくりに貢献している。

プログラムオフィサーのコメント

本事業の特徴は、だれもが実践できるようプロセスを公開している点です。地域活動をはじめたい人や他の公民館職員の参考になるよう、YouTubeやブログでその進め方をくわしく紹介しています。ありものを組み合わせるブリコラージュという手法やオープンソースのワークショップを提供しているのもそのため。さらに、評価ロジックモデル「わかさ式プログラムづくりのじゃばら手帳」を開発し、自己評価にも取り組んでいます。第70回優良公民館表彰最優秀館(日本一)受賞おめでとうございます!(樋口)

活 動 詳 細

- ①パーラー公民館(移動式屋台型公民館)プロジェクトの継続展開
- ②就労支援協力
- ③パーラー公民館ワークショップ及びイベント
 - ・「あけぼのZINEをつくらう!」ワークショップ
 - ・「ご近所映画クラブ」
 - ・「うみそら上映会inあけぼの」
 - 各会場:曙小学校(那覇市)
 - ・「ちょこっとハロウィン」
 - 会場:曙小学校ほか
 - ・「発見!探検!みんなのまちinナンポー」
 - 訪問先:ナンポー港町工場(那覇市)
 - ・「あけぼの公園かんしゃ祭」
 - 会場:曙公園(那覇市)
- ④情報ハブとしての機能を拡充するパーラー公民館をメディア化(媒介化)する
パーラー公民館に、多様な視点で地域情報を収集、発信するための「ZINE KIOSK」を開設
- ⑤これまでに開発したワークショップの他地域展開
 - ・「ZINEづくりワークショップ」
 - 会場:石垣市子どもセンター(石垣市)
 - ・「ご近所映画クラブinまきら子どもホッ!とステーション」
 - 会場:まきら子どもホッ!とステーション(石垣市)
 - ・「ほしぞら上映会in石垣」
 - 会場:真喜良第3団地自治会広場(石垣市)
- ⑥フォーラム事業の開催
 - ・勉強会「みんなでkangaeru公民館のこと。」
 - 会場:緑ヶ丘公園くもじ・にじいる館(那覇市)
 - ・「モヤモヤ読書会。」
 - ・「パーラー公民館大報告会2019」
 - 各会場:那覇市若狭公民館(那覇市)

祭祀を記録した写真による 地域の精神文化創出に資する事業

まぶいぐみ実行委員会

住 所 沖縄市中央4-1-3 2F ギャラリーラファイエット内

メール rougheryet@gmail.com

URL facebook.com/mabuigumi/



浦添市での展覧会風景



宮古島市での展覧会風景



比嘉康雄宅でのアーカイブ作業

写真の新たな意義 可能性の模索

まぶいぐみ実行委員会は、2015年の写真展「戦後70年沖縄写真まぶいぐみ展」（那覇市民ギャラリー）を皮切りに、「コザ暴動プロジェクト」や県内の若手写真家やアジアの写真家との交流展など、現在に至るまで継続的に写真展を開催している。活動を重ねていくなかで、写真の芸術的価値のみならず、記録やアーカイブ資料としての資料的価値にも注目するようになった。写真は撮った写真家の「作品」としてのみではなく、写された現場に「返す」ことで新たな写真の意義である「歴史の記録」「現場の眼」が表出できるのではないかとまぶいぐみメンバーは考えている。写真家による祭祀の写真を現場に返す。そのことによって、忘れていた記憶を呼び戻し、継承できる祭祀のかたちを模索する。今年度は宮古島に焦点を絞り、祭祀や地域を捉えた写真の展覧会を開催。時代とともに消えゆく風習、精神文化の復興を目指した。

写真展の実施に向けて実行委員会を設立

宮古島の地元新聞社、宮古島郷土史研究会などと、有志による実行委員会を設立。1970年代に、比嘉康雄氏と上井幸子氏（ともに故人）により撮影されたウヤ

ガンなど、宮古島各地域の祭祀の写真そのものを文化遺産（資産）として位置づけ、撮影された宮古島と、沖縄本島内で写真展とシンポジウムを開催した。

宮古島出身者が多く参加する郷友会を中心に話題は広がり、浦添市美術館で展覧会を開催した際には、5日間と短い期間にもかかわらず700名以上が訪れた。また、テレビや新聞社からも連日取材を受けたことから、その情報は宮古島にも届き、開催前から、展覧会の開催を楽しみに待っている方が多く、注目された。シンポジウムでは、宮古島にゆかりのある方を中心に、来場者から祭祀の継承のことなど、活発な意見が出た。また、撮影された地元自治会などからの要望により、展示された写真をプリントして、自治会に渡すことも検討している。

写真家のアーカイブ作業

写真にまつわる課題は、地域との関わりとは別にもう一つある。写真家の没後、家族（遺族）がその管理に苦慮し、ネガやプリントの経年劣化が進み、貴重な記録が失われる可能性があるということだ。展示する比嘉氏の祭祀を写した写真は、多くの賞を受賞するほか、没後も沖縄県立博物館・美術館や、東京都写真美術館等で展示、写真収蔵されるなど、国内外で評価が高い。比嘉氏が遺した膨大な写真と取材記録はしっかりとアーカイブ

すれば、今後貴重な文化遺産として利活用される可能性もある。今年度は宮古島の写真のネガやプリントなどの関連資料を、大学等、専門機関・専門家の協力を得て、アーカイブ化している。写真家のグループであるまぶいぐみだからこそ、沖縄写真の発展のためにもアーカイブ作業は継続的に取り組んでいきたいことの一つだ。今年度は宮古島に焦点を当てたが、今後は八重山諸島や沖縄本島など、別の場所にも広がっていかうと考えている。

プログラムオフィサーのコメント

開催された写真展はいずれも多くの地元メディアに報道され、シンポジウムも大盛況でした。浦添展では宮古島にルーツのある方が多く訪れ、知っている場所を懐かしみ、また、親戚が写っていると指さしながら嬉しそうに鑑賞していたので、展示会場は終始にぎやかでした。また、シンポジウムでは、ウヤガンを再開したいという声も会場から上がり、地元の方々の士気を上げることに貢献したことは間違いありません。（芦立）

活 動 詳 細

- ①写真展実行委員会体制の確立
- ②本島在住の宮古島からの移住者や歴史・文化関係者へ向けて写真展とシンポジウムを開催
写真展「よみがえる宮古島の祭祀写真
『神々の古層』比嘉康雄・『太古の系譜』上井幸子」
会場：浦添市美術館（浦添市）
- ③宮古島市の歴史・文化関係機関や各自治会、個人の協力者を募り、写真展、シンポジウムを開催
写真展「よみがえる宮古島の祭祀写真
『神々の古層』比嘉康雄・『太古の系譜』上井幸子」
会場：宮古島市中央公民館（宮古島市）
- ④故比嘉康雄の宮古島を中心とした祭祀の写真を整理、アーカイブ

漢那ドライブインアートプロジェクト2018

漢那ドライブインアートプロジェクト委員会

住 所 国頭郡宜野座村漢那1624
 メール kannartinfo@gmail.com
 URL facebook.com/kannadrivein/



大勢の参加者で賑わったワークショップ

地元で愛されたレストラン

那覇空港から車で北に約90分、太平洋側に位置する宜野座村は、豊かな自然を誇り、農業と漁業が盛んな人口約6000名の村。豊年祭やエイサー、県の無形民俗文化財にも指定されている京太郎（チョンダラー）など、芸能の継承が盛んに行われている地域でもある。

このアートプロジェクトの拠点になる「漢那ドライブインレストラン」は、与那原町から名護市に向かう東海岸を走る国道329号線沿いにあり、これまで多くのドライバーの休息場所として活用されてだけでなく、地元の人々にも日頃からお祝い事や行事などに愛用されてきた。2016年に廃業した後も、4代目であったオーナーが建物をそのまま残し、現在は2階部分で民宿を続けている。

「作品」「人」「空間」をつなぐ

やんばると呼ばれる本島北部には、気軽にアート作品を展示、鑑賞できる美術館的な場所というものほとんどなく、連日のように展覧会が開催されている那覇地区と比べると、地元の人々、特に教育的な面から子どもたちがアート作品に触れる機会が少ないことが課題であった。そこで、地域の人にとってなじみのある漢那ドライブインレストランという場所を利用し、さまざまな

アーティストによる展示会を開催することで、アートを鑑賞できる機会を提供し、そこに人々が集う新たなコミュニティ「出会いの広場」づくりを考案した。

アート展の開催

2018年の春にトライアル事業開催後、今年度、夏秋冬と3回の展示会を開催。夏展「ぼくたちの台湾展」（2018年8月18日～9月30日）、秋展「カンドラの秋」（2018年11月4日～12月16日）、冬展「concrete visions」（2019年1月26日～2月24日）と毎回テーマを変え、主に県内を中心に活動しているアーティストが、写真・映像・切り絵・イラストなどを展示、全3回の展示会で約30名のアーティストが参加した。徐々にアート展の話題性も高まり、メディア・雑誌でも取り上げられた。地元以外の遠方からも訪問があり、来場者に向けたアンケートには、アート空間である会場の居心地の良さや、感謝の言葉、ドライブインでの思い出が多く書き留められている。

アートセンターのような場所を目指して

プロジェクトでは、展示以外にも、アーティストと参加者が交流できる場（トークショーやワークショップ）を設け、台湾と宜野座の少年野球交流試合の写真展示



地元の保育園の子どもたちと記念撮影



アーティストとの交流を楽しむ子どもたち

（夏展）や、宜野座周辺の散策会や撮影会（冬展）などのプログラムも企画。地元の幼稚園・小学校の子どもたちの訪問を受けるなど、世代を問わず、気軽に人が集まれる場所づくりを実施している。

建物にも老朽化がみられ、存続が気になる漢那ドライブインレストラン。今後も地元の人に寄り添い、思い出を共有することも大切にしなが、アートを通して多くの人が交流できるアートセンターのような場所として機能することを目指し、活動を続けていく。

プログラムオフィサーのコメント

建て替えが盛んに進められる現在だからこそ、立ち止まって過ぎ去った時間を誰かと共有しながら語り合える場所があることは、大いに意義があると感じています。今後も地元の人だけでなく、やんばるの中心として人が集う拠点となり、このプロジェクトが大きく発展していくことを楽しみにしています。（新城）

活動詳細

「漢那ドライブインアートプロジェクト」
 (夏)、(秋)、(冬)と3回開催
 ・夏:「ぼくたちの台湾展」
 ・秋:「カンドラの秋」
 ・冬:「concrete visions」
 各会場:漢那ドライブイン(宜野座村)

ジュニアジャズオーケストラによる 子どもの居場所づくり

一般社団法人 琉球フィルハーモニック

住 所 那覇市田原1-12-6

メール info@ryukyuphil.org

URL http://ryukyuphil.org/



音楽を通じた友達づくり

子どもの居場所づくりを目的に ジュニアジャズオーケストラおきなわ 那覇ウエストを設立

2016年10月から那覇市津波避難ビルを拠点に「ジュニアジャズオーケストラおきなわ那覇ウエスト（以下、那覇ウエスト）」が始動。子どもの居場所づくりを目的に、対象エリア（若狭小学校、天妃小学校、曙小学校、那覇小学校、泊小学校区）を定めて、無料にて毎週2日の練習を開始する。音楽を楽しむ環境を整えながらも、学校や家庭といった既存の場とは違った、安心して通える第三の居場所づくりである。取り組みは、一年ごとに修了式を設け、活動の区切りにおいてアンケート調査を実施。居場所づくりの効果や課題を整理することで、よりよい環境づくりを目指すことも重要視している。

本格的な音楽指導だけでなく ビジョンを共有することで 子どもの居場所としての環境を整える

音楽を学び、楽しむ環境をしっかりと築くことも、日頃より音楽の活動や指導を行う琉球フィルハーモニックだからこそできることである。指導する講師は、現役で活躍するプロのミュージシャン。分け隔てなく本格的な指導を受けられることがこの事業の最大の特徴である

が、音楽指導だけに注力しておらず、子どもたちの信頼を得られるように気軽に話し相手となるような関係性の構築、自立を目的とした「子どもの居場所」として心のより所になることを最優先として考えている。

居場所としての環境を整えるため、琉球フィルハーモニックでは、講師やフェローを対象とした研修会を積極的に実施。内容は「子どもの貧困について」や「発達障害について」、「子どもの権利条約と大人の対応」など、子どもを取り巻く環境について理解するためのものである。講師たちは、実例をもとに活発なディスカッションで、子どもに対するときの留意点などを確認し、ビジョンを共有することで日頃の練習に活かしている。

琉球銀行「ユイマール楽器バンク」の協力のもと 楽器の寄付を呼びかける

楽器の寄付の呼び掛けを協力しているのが琉球銀行。那覇ウエストの趣旨に賛同し、75カ店の窓口で使われなくなった楽器の寄付を呼びかけている。使用している楽器の大半は、「ユイマール楽器バンク」を通じた寄付であり、そのお礼にと12月には子どもたちの成果発表を兼ねて本店にて演奏会を実施した。



地域との連携による若狭公民館まつりへの参加



ふだんの活動のようす

子どもたちや講師のアンケートなどをもとにした 専門家による調査と考察

子どもの居場所としての機能について、専門家による評価を行った。「参加すると楽しい」「悲しい時に助けになる」の項目のアンケートでは、開始時よりも価値の認識が上がり、「居心地がよい」という項目でも、学校や習い事よりも評価が高く、安心できる場所として認識されることが理解できた。また、当初より仲間たちとの積極的なコミュニケーションが活性化したことで、自己受容感・自己肯定感が高まったことが調査を通しわかった。この結果は、講師たちに対し実施した研修会などが、居場所づくりとして効果をもたらしていることを表している。

プログラムオフィサーのコメント

那覇ウエストは、2～5曲のジャズライブを、地域の文化祭や、スポーツや食のイベントなどで、7回も実施することができました。ソロのパートもあり、当初は緊張も伺えましたが、回を重ねるにつれてしっかりとした表情でパートをこなすようになりました。ジャズミュージシャンの講師たちは、子どもたちが音を見失うと道しるべになるようにそつと後ろで音を出して教えたり、人前で緊張して最初の音が出せない子にはその場で優しく肩をさすったりと、発表会までの道のりにも、それぞれの楽器の担当の場でも葛藤や苦労があるように見え、子どもたちが成長した姿に感動をしました。(島袋)

活 動 詳 細

①ジュニアジャズオーケストラ事業

- ・週2回の練習会開催
- ・発表会の開催
- 会場：那覇市津波避難ビル（那覇市）

②子どもたちとの関わりにおける

プロのジャズ講師とフェロー育成事業

③地域との連携

- 地域の行事への参加
- 会場：那覇市若狭公民館（那覇市）、琉球銀行本店（那覇市）ほか

④アンケート調査事業

⑤記録・広報事業

- リーフレットや冊子、報告書の作成



チーフプログラムオフィサーが語る アーツカウンシルの姿

——— 沖縄アーツカウンシルの事例から

野村 政之 × 林立騎 × 樋口 貞幸

本特集は、チーフプログラムオフィサー(当時)3名が、沖縄アーツカウンシル(「沖縄文化活性化・創造発信支援事業」及び「沖縄文化芸術を支える環境形成推進事業」)のこれまでを振り返りながら、今後の文化環境づくりについて語ったトークイベントの内容を再編集したものです。

「アーツカウンシル」とはなにか

林立騎 (以下、林) : まず導入に、アーツカウンシルとはどのようなものかについて、私の観点を交えてお話しします。アーツカウンシルという組織を考案したのは、経済学者のジョン・メイナード・ケインズで、経済学者が考えた仕組みだということが一つ大きなポイントになると思います。「ケインズ経済学」の創始者ですのでご存知の方も多と思います。未来は不確実なので、自由競争、自由放任主義だけに任せておくと、確実性の高い分野

にお金が集まり、未来を変えるかもしれないが、まだ不確実な分野にはお金が集まらなくなる。そこで、必要な分野に公金を出して、不確実でも重要な分野を行政が支え、同時に経済活動を活性化させようという、公共事業、公共投資の理論を作った人ですね。

では、なぜこの人がアーツカウンシルを考えたかという、第一に文化人だったから。小説家のヴァージニア・ウルフら文化人たちのサークル、「ブルームズベリー・グループ」¹ に入入りし、奥さんは有名なロシア人バレリーナ² でした。

1 ブルームズベリー・グループ: 1900年代初頭、英国の芸術家や学生により結成されたサークル。小説家のヴァージニア・ウルフらが参加、その後の文学や思想に影響を与えた。

2 リディア・ヴァシリエヴァ・ロポコワ: ディアギレフのバレエ・リュスで活躍。ピカソらとも親交を深めた。

彼は、英国の大蔵省に勤めた後、世界銀行の総裁にまで昇りつめ、晩年にアーツカウンシルという組織を提案します。これは第二次世界大戦時に文化芸術が政治に利用された反省から考えられた組織とされています。例えば、前線に演劇や音楽隊を派遣して上演させたり、あるいは戦意高揚映画を作ったり。そういう形で文化芸術は政治に利用された。その反省に立ち、文化芸術の発展のために、国家あるいは政治から距離を取った³ 専門家の組織を作ろうと考えたのがアーツカウンシル制度の起こりです。

国家に干渉されずに文化芸術を発展させていく。彼が、自由競争だと振興できないが、しかし発展させるべき重要な分野があるから、そこに公金をつけようという考えをもった経済学の創始者だったことが、アーツカウンシルの設立に関連していると私自身は思っています。

元々は政治的な介入を遠ざけるための文化の専門家組織ということですが、今の世の中では政治によるあからさまな文化芸術の利用だけでなく、例えば日本でどうい問題があるかという、文化や芸術の成果が単純な動員数や売り上げといった指標で計られるということも、悪影響を及ぼしかねない部分があると思います。

政治的利用から守るだけでなく、単純な経済的基準や、あまりにわかりやすい基準で文化や芸術が判断されることを防ぐために、専門家の組織が必要なのだと考えています。

野村政之 (以下、野村) : 日本でアーツカウンシルが設置され始めたのは最近のことで、沖縄は全国的に見ても早い取り組みです。2012年に国(芸術文化振興基金)、東京都、沖縄県、その翌年に大阪府が開始し、いまではおよそ10の都道府県や市が地域版アーツカウンシルの立ち上げに取り組んでいます。設立の背景は、地域によってそれぞれ異なります。沖縄版アーツカウンシルは当初「文化の産業化」といった観点から進められました。東京都では「五輪誘致」、大阪府では「大阪都構想」の柱のひとつという背景がありました。

大筋で共通しているのは、文化事業に対してどう公

3 「アームズ・レングス(armslength)」の関係とも呼ばれる。



金を費やすのか、専門家組織による選定や支援、評価を行うという点です。ただ現状、日本にはまだこの取り組みのモデルとなる事例はありません。専門家を配置するだけでなく、自立的な判断のもとに中間支援を行って、芸術文化団体の自由な活動を後押しすること。その結果として、地域の文化資源を活用し、社会に新たな展開をもたらすことがミッションですが、まだ十分な取り組みとはなっていません。

沖縄も一つの先行事例として、依然、アーツカウンシルのあり方自体を探っているところ。どうやってより意味のあるものにしていけるのか試みているところだと捉えていただいた方がいいと思います。

樋口貞幸 (以下、樋口) : カウンシルは「評議会」と訳されるように、アーツカウンシルにおいてももっとも重視すべきことは、方向性を一人の人間が決めるのではなく複数の知見から物事を決めていくという、ある種の民主的なやり方だと捉えています。沖縄の文化的自治のあり方みたいなものを掲げた上で、文化の振興をしていきたいと思いますという理念を体現化していくことが求められていると考えています。

野村さんが言うように、それぞれの地域の中で設立の背景が異なるので、沖縄の場合、沖縄独自のこのアーツカウンシルのあり方をいままさに模索しているところ。です。

沖縄アーツカウンシルの特徴 ～プログラムオフィサーの役割

野村: 沖縄アーツカウンシルの一番の特徴は、プログラムオフィサーがパートナーとして、事業者の方々の活動に寄り添って支援しているところだと考えています。事業者の進みたい方向を見据え、私にどうサポートできるかを考える。公的な事業では、「支援」の名のもとに上から指示をするようなことが未だに多くありますが、私たちのアーツカウンシル事業では、できうる限り事業者の進みたい方向を尊重しています。ここは他地域と比べても、沖縄アーツカウンシルのよいところで、特徴なんじゃないかなと思うんです。

樋口: そうですね。私が沖縄アーツカウンシルに来て興味深い仕組みだと思ったのは、プログラムオフィサーがフリーランスということでした。

例えば、野村さんはドラマトウルクという専門的な仕事をされているし、林さんはドイツ語の翻訳家。それぞれに、演劇やアートプロジェクトのクリエイションにも関わっておられますよね。私もアートプロジェクトに関わっていますから、事業者の立場でもある。この仕組みはユニークかつ、実践的だと思います。

林: 私が大事だと考えているのは、時間軸です。我々が支援させていただいているプロジェクトも、今後応募していただくプロジェクトも、長い時間をかけて課題が浮かび上がってきたり、こういうことをやりたいと考えられたプロジェクトが多いと思うんですね。芸能の継承



の問題とか、琉球料理を子どもたちがあまり分からなくなっているとか、たくさんの8ミリホームムービーが活用されないまま残っているとか。長い時間をかけて抽出された課題に、事業者のみなさんは対応しようとしておられる。それにも関わらず、どうしても行政の理屈で単年度の成果を求めることになる。しかし長い時間をかけて生まれた課題が、一年や三年で解決できるわけがありません。我々の支援は一年だけかもしれないけれども、事業者の方々はそれから先もずっと活動していくわけですよ。とすると、補助金でその人たちが疲れ切ってしまったら、それはむしろ悪影響しかない。そこをどう考えるか。もちろん補助金である以上、年度ごとに書類を作っていただくとか、報告していただくのは重要なんです。我々が単年度の成果に注力しすぎではいけないと思っています。

つまり、ハンズオン支援の立場であるプログラムオフィサーまでが本当に本気になって、今年度の成果を出してください、三年間で結果を出してくださいというのは、歴史や未来に対する冒険ではないかとさえ思うことがあります。

行政には行政の時間があり、プロジェクトにはプロジェクトの時間がある。その間に立って、どうその両者を互いに無理のないよう調整するかが我々の役割ではないでしょうか。

野村: いまの指摘は非常に重要ですね。文化芸術の取り組みには「終わり」や「切れ目」がありません。植物の生長みたいなものと言えればわかりやすいでしょうか。枝を切れば伸長が止まります。年度という時間の枠で区切るという矛盾、ある種の暴力的な切断が、持続的な活動を阻害しないようにする必要があります。

みなさんの中には「だから税金を使うのは面倒なんだ」と考える方もおられるでしょうし、一方で行政職員はこの矛盾をよく分かってもいます。そこで私たちが文化芸術の専門的な視点から、事業者と行政職員の双方に有効な手立てを提案する。いずれにしてもお金や知識は必要なので、うまくこの資源を供給して、栄養を摂ってもらう。そして文化芸術に取り組むみなさんに継

続的に活動できる地力を蓄えていただけるように、柔軟にハンドリングすることが私たちの役割かなと考えている節があります。

文化関係者以外にも届く言葉をもつ

林: 文化に関心のない方たちと我々は議論しなければいけません。つまり、文化芸術は個人の趣味にすぎないと思っている方に対して、税金を使うことをどう納得していただくか。

文化は社会の基盤です。一般的に経済活動が社会の基盤だと思われがちですが、経済だけで人が人らしく生きられるわけはなく、歴史があり文化があって、地域が生まれ、都市が形成されます。ですから、文化は生活の基盤であると言い続けなければなりません。

そして、文化は言葉と行為でできています。その行為の部分事業者の方々が担っています。それに対して我々は、どういう言葉をつけて社会に発信できるのか、そして、どのように文化芸術の地位を変えていくことができるのか。文化芸術には、地域の課題を解決する力があったり、地域の基盤になったり、あるいは国際交流の要だったり、歴史を知るきっかけであったりする可能性があるということを、行為と言葉の両方から伝えていく。

注意しなければならないのは、文化芸術というのは、社会の基盤、インフラであって、「消費財」ではないということです。これは非常に大切な考え方です。文化は、できるだけ多くの人に消費してもらえば良いというものではありません。でも、そう考える文化の外の人と対話をする必要もあります。そのバランス感覚に敏感でなければなりません。

樋口: 文化は社会インフラであるという指摘は、その通りだと思います。経済的な投資は、地域をある種分断してしまうとか、格差を助長してしまうきらいがあります。他方で、文化的な投資は、地域に新しいつながりを生み出すということ、実際に目の当たりにしてきま



した。

よく言われるのは、衣食住がそろっていても人は生きていけないということです。阪神淡路大震災での反省としても語られますが、文化的なつながりが、人の尊敬をもたらします。我々文化にたずさわる者の仕事は、「最低限の文化的な生活」の、最低限をどれだけ高められるかであって、それが本来の社会的投資としての文化振興だと考えています。

グローバルな視点からみる地域の取り組み

野村: いま沖縄では、文化の魅力によって観光や産業を起こし、経済的な影響力を増すことへの要請も強くなります。これも実感を持った前向きな意見だと思います。

他方、採択団体の与那国フォーラムの事業で、東北で芸能に携わっている方から、震災後、郷土芸能の重要性が再認識されていることを伺いました。文化によってアイデンティティを確認し、人々の心に力を与えている例です。

今は日本の中にありますが、かつてアジアにおいて広く交易を行い、友好の輪を広げて独自の文化を育んできた琉球・沖縄にとって、この視点を忘れることはできません。これら2つの視点をどう両立させることができるのか。とても重要なことだと思います。

私は近年、何度か東南アジアを訪れる機会がありました。私は内地の出身ですが、「沖縄から来た」と言うと、現地の人たちは親近感をもって接してくれ、「沖縄までは東南アジアだよ」なんてことを言ってくれたりもしました。現地でかりゆしウェアを着ていても、なんとなくしっくりきます。東京や関西では、浮いてしまうよ

うに感じてあまり着ないのですが。

今年度、アジア地域との交流事業が複数採択されています。ご承知の通り、経済界でもアジアの経済発展と沖縄をどう結びつけるか、盛んに検討されていますが、歴史的、文化的な意味においても、沖縄の立地的なポテンシャルや、その背景にある共通性を捉え直すことは、今後ますます重要になるのではないかと思います。

グローバルな資本主義の進展で、さまざまな地域で伝統文化が危機に晒される一方、同時にその価値が再認識されてもいます。また、いま沖縄が抱えることになった課題や、強国の支配を受けてきた歴史的経験は、アジアの諸地域を含む国際社会の中においてこそ、深い理解が得られるのではないかと思います。

林: 観光、経済、それからアジア、あるいは国際的な関係から少し思い切ったことを言いますね。私は沖縄時事出版社の事業立会いで日曜日まで韓国プチョン市にいました。プチョン市は、文化産業を基盤にした街づくりを政策に掲げていて、たくさんの文化施設を持っています。中でもごみ処理場をリノベーションしたアートセンターが素晴らしかった。ゴミ処理場の巨大な建物はそのままに、中を綺麗にリノベーションして現代美術と舞台芸術の創作・発信・教育普及の場にしています。こうした産業遺産や建築遺構の文化転用は世界的な傾向といえます。沖縄であればたとえば、返還される米軍基地をアートセンターにするということは考えられないでしょうか。つまり、過去の痕跡を消して観光客向けの商業施設にするのではなく、そこにあった歴史を忘れないということと、その文脈や経験の延長線上で人々が交流したり、学びあったり、展覧会や公演を見たりする、本当の意味で文化的な施設をつくる。それができれば、アジアのみならず、世界的に画期的な例になるでしょう。また、これは経済や観光とも決して無縁な話ではありません。

樋口: 普段、私たちは地域で活動しておられる事業者の皆さんに寄り添い、同じ目線で支援に取り組んでいます。実はもっと広いところから見てもいます。グローバ

ルな潮流も頭の隅に置きながら、沖縄での文化活動に関わらせていただいています。私自身も、大阪で近代産業を支えた巨大な造船所遺構でのアートプロジェクトに関わっていますが、こうした遺産の文化転用は世界的にもスタンダードです。このグローバルとローカルを往来することもプログラムオフィサーに求められているもう一つの役割ではないかと、お二人の話しを聞きながら感じました。

支援する上で心掛けていること

樋口: 私たち3人はこれまで、日本のみならず各国の文化政策に触れてきましたし、各地の文化関係者とつながりを持っていますので、「こんな捉え方ってできるかもしれないね」、「こんな方法論があるよ」と活動の選択肢を幅広く提供できます。ただ、自覚しなければいけないのは、アーツカウンシルは行政権力の側でもあるということ。支援の名のもとに、「ああしなさい」、「こうした方がいい」と一方的になってはいけなくと常々気をつけています。

野村: ここに住んでいる生活からどう沖縄のことを表現するのか。芸術文化を通して、沖縄に住んでいる人の実感に基づいた表現を、沖縄の人や沖縄のことを知らない人に伝える機会をもっと増やしていきたい。その土壌づくりにこれまで取り組んできた、という気持ちが私にはあります。これは単に「事業者の方の進みたい方向に寄り添う」という意味だけではなくて…、やはり私が県外出身者であることと関係していると思いますが、沖縄で活動をしている人を、決して私の枠に嵌めたくないんです。極端に言えば、自分が植民地主義的な立場に立ちたくない。まだ道半ばですが、そういうモラルは持ってやってきたつもりです。

あと、もう一つ重要なことは、今のアーツカウンシル事業の中で採択に至らず、支えることができていない取り組みに対しての関わり方です。昨年「ぶんか」とほじょきんそうだん会」をスタートさせました。那覇周辺



だけでなく離島でも行って、毎回いろんな相談が持ち込まれています。資金的支援以外にも、こういう仕組みがもっと作れるかもしれません。沖縄県の多様な文化芸術の環境をつくるための取り組みがさらに求められていると感じます。

樋口: 唐突ですが、結局は回りまわって自分のためにいまこうした仕事をしているんだと思っています。なぜ文化芸術事業に従事しているのか、プログラムオフィサー同士でも話題にのぼることがあります。私の場合、心の琴線に触れる個人的な体験をしたということに尽きるのですが、芸術作品によって自分自身の存在がより鮮明になる出来事に遭遇したことがきっかけです。地域でのアートプロジェクトを通して自分の理想とする多様性の担保された社会をつくりたい。エゴイスティックなんですよ。でもそれは、誰かの生存が自分の生存に関わっているという当たり前のことを尊重する社会ではないでしょうか。

林: 私も自分のためにやっているという意識はとても強いです。やればやるほど勉強になることばかりで、仕事は楽しいです。自分が担当している事業から教えてもらうことばかりです。沖縄県産本のことを教えてもらったり、島々の芸能や祭祀について伺ったり。すべてが自分のためになっています。

支援で一番大切にしているのは、100%の関心と敬意を寄せることです。新しいことに取り組む人を心から尊

敬しています。そこに対する敬意を絶対に忘れないということと、自分が本気で関心を持って色んなことを学ばせていただく姿勢。

野村さんと重なりますが、自分のこれまでの経験から判断するんじゃなくて、事業者の方々からとことん学ぶ。そして、意義があると考えておられることを思いきり表現していただけるようにプロセスをサポートしていくことが大切だと思っています。

トークイベント

「文化芸術の環境づくりに向けて —沖縄アーツカウンシルを語る—



今年度の支援事業及び沖縄版アーツカウンシルの紹介を兼ねたトークイベントを開催。

内容: 補助事業及びその成果報告「沖縄文化芸術を支える環境形成推進事業の概要と補助事業の紹介」
チーフプログラムオフィサーによる鼎談「アーツカウンシルとは?」

日時: 2018年9月10日(水) 15:00~17:30
会場: 沖縄県立博物館・美術館 博物館講座室
実績: 来場者数70名

相談会 「ぶんかとはじょきんそうだん会」



「ぶんかとはじょきんそうだん会」は、県内で文化芸術に携わる方々を対象に、平成29年度より相談機会の提供に取り組んでいる事業。毎月20日に那覇市で、不定期で宮古島市及び石垣市で開催。

| | | |
|----------|-----------------------------|-----|
| 平成30年度実績 | 那覇市 | 11回 |
| | 宮古島市 | 4回 |
| | 石垣市 | 4回 |
| | 糸満市 | 1回 |
| 相談実績 | のべ 201組 281名 (2019年2月20日現在) | |

企業メセナシンポジウム

「パートナーシップによる企業の文化活動
【あたらしいメセナのカたち】」



本シンポジウムでは、沖縄文化芸術を支える環境形成推進事業に取り組む事業者と民間企業がパートナーシップを組み二人三脚で取り組む、文化芸術を活かした地域づくり、人づくりの事例を紹介。

内容:基調講演「文化を通じた地域とのつながりづくり」
 沖縄ツーリスト(株)代表取締役会長 東 良和
 事例紹介1「企業のリソースを生かしたパートナーシップ」
 (一社)琉球フィルハーモニック+(株)琉球銀行
 事例紹介2「地域を豊かにする社会貢献」
 (株)ククルビジョン+エアポートレーディング(株)
 事例紹介3「社内のつながりを生む『創業者物語』」
 (一社)おきなわ芸術文化の箱+金秀グループ
 トークセッション「企業と文化団体が協働する意味～企業のメリット、文化団体のメリット、地域・社会のメリット～」
 日時:2019年3月1日(金)13:30～17:00
 会場:沖縄県教職員共済会館4号社・屋良ホール

芸能継承フォーラム

「芸能の継承と沖縄の文化振興」

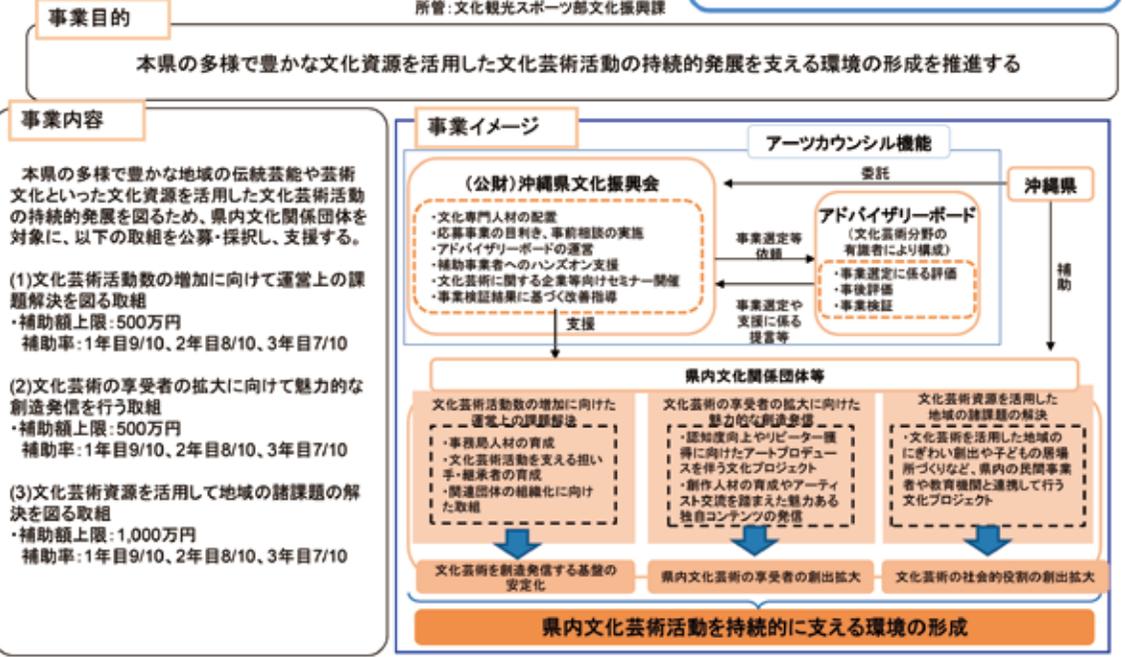


本フォーラムでは、沖縄文化芸術を支える環境形成推進事業を活用して後継者育成に取り組む石垣市、竹富町、与那国町での事例を紹介。取り組みからみえてきた課題と可能性について意見を交わす。

内容:プレゼンテーション「芸能の継承に関する事例紹介」
 事例紹介1「次世代を担う八重山芸能後継者育成支援事業」
 (同)白保企画
 事例紹介2「映像・記録作成資料を活用した地域文化の次世代育成事業」
 古見公民館
 事例紹介3「与那国民俗芸能の継承に向けた調査、及び人材育成計画策定事業」
 (一社)与那国フォーラム
 トークセッション「芸能の継承と文化振興～取り組みから見えてきた課題と可能性～」
 日時:2019年3月19日(火)18:00～20:30
 会場:沖縄県立図書館 新館3階ホール

No.2,23,59 沖縄文化芸術を支える環境形成推進事業

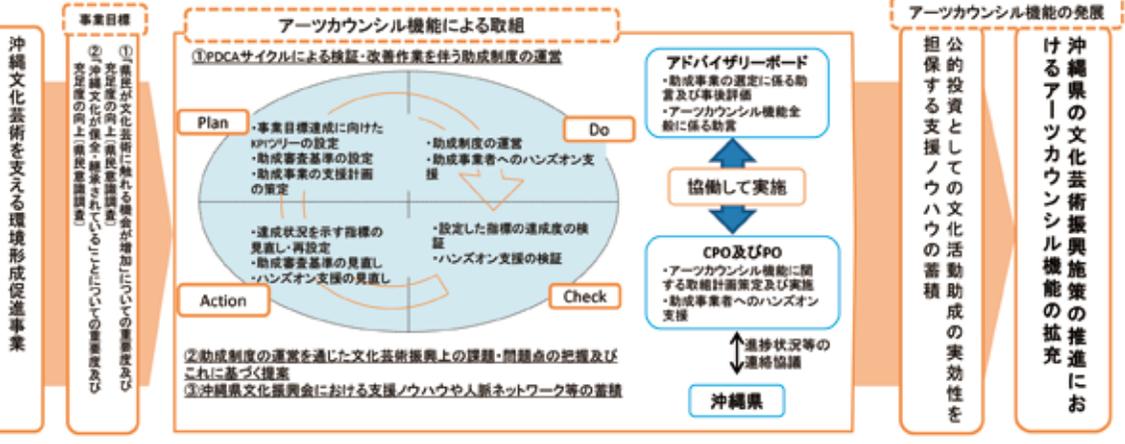
・平成30年度当初事業費:105,935千円
 (うち国費 84,748千円)
 ・事業期間:平成29年度～33年度



沖縄文化芸術を支える環境形成推進事業におけるアーツカウンシル機能について

- 沖縄県がアーツカウンシル機能を導入する意義
- 本事業の事業目標の達成に向けた、有効かつ効率的な公的投資としての助成制度の構築
 - 本事業の事業目標の達成に向けた、文化関係団体への有効かつ効率的な支援体制の構築
- 沖縄アーツカウンシル機能に求める役割
- 事業目標の達成に向けたKPI(重要業績評価指標)の明示。
 - 同指標の最大化に向けて、Plan→Do→Check→ActionのPDCAサイクルを通じた検証・改善作業を伴う助成制度の運営。
 (※助成制度全般、助成審査基準、ハンズオン支援の在り方等について、年度ごとに検証・改善作業を行う)
 - 助成制度の運営を通じた、沖縄県の文化芸術振興上の課題・問題点の把握及びこれに基づく提案。
 - 沖縄県文化振興会における、支援ノウハウや支援に必要な人脈ネットワーク等の蓄積。

沖縄文化芸術を支える環境形成推進事業におけるアーツカウンシル機能のイメージ



沖縄アーツカウンシル

平成30年度沖縄文化芸術を支える環境形成推進事業 支援事業事例集

発行日：2019年2月28日

発行：沖縄県

写真：支援事業者提供

デザイン・印刷：株式会社 東洋企画印刷

企画・編集：公益財団法人 沖縄県文化振興会

〒901-0152

沖縄県那覇市字小禄1831-1 沖縄産業支援センター6階 605号室

TEL 098-987-0926 / FAX 098-987-0928

E-mail info-oac@okicul-pr.jp

<http://okicul-pr.jp/oac/>